

NISHI KUMAMOTO HOSPITAL

30th
ANNIVERSARY



医療法人 相生会
にしくまもと病院
創立30周年記念誌

医療法人相生会
にしくまもと病院
創立30周年記念誌

目次

1. 理念・基本方針・臨床倫理の基本方針・患者の権利・責務について	2
2. ご挨拶	3
・入江 伸 (医療法人 相生会 理事長)	
・林 茂 (医療法人 相生会 にしくまもと病院 病院長)	
3. ご祝辞	8
・福田 稠 (熊本県医師会 会長)	
・小田 貢 (医療法人 真誠会 理事長)	
・浦江 隆次 (医療法人 相生会 代表)	
4. 熊本ホスピタウン構想	12
5. ホスピタウン交流会のあゆみ	14
6. 病院概要	17
7. 施設基準	18
8. 組織図	19
9. フロア図	20
10. にしくまもと病院のあゆみ	22
11. 地域との輪・職員の輪	32
12. 熊本地震	35
13. にしくまもと病院の取り組み	38
14. 部署紹介・職員紹介	41
15. 将来に向けて	61
・山口 浩司 (医療法人 相生会 にしくまもと病院 院長代行)	
16. 統計	64
17. 30年を振り返って	70
・小西 淳二 (医療法人 相生会 にしくまもと病院 前理事長)	
・佐藤 圭創 (九州保健福祉大学 薬学部臨床生化学講座 教授)	
・村崎 秀 (元富合町 町長、富合校区社会福祉協議会 会長)	
・辻 重喜 (医療法人 相生会 にしくまもと病院 臨床薬理センター 副センター長)	
18. 思い出写真館	73
19. 編集後記	79

理念

いつも患者さんに寄り添い、強く、優しい、優れた病院を目指します。

基本方針

1. あなたに寄り添い、心のかよった医療を提供します。
2. 医療人として常に向上心を持ち、進歩する、質の高い医療を提供します。
3. 職員一人ひとりを大切に、心豊かな輝く医療人となることを支援します。
4. あらゆる職種が信じあつて協働する「チーム医療」を実践します。
5. 地域に根ざし、調和する、頼られる日本一の病院を目指します。

臨床倫理の基本方針

1. 患者の人権を最大限尊重するとともに、患者と病院職員が協力し、患者の利益を追求するための最善の医療を提供します。
2. 患者個人の信条や価値観に十分配慮した上で、生命倫理に関する関係法令、ガイドライン及び院内規約の実施手順に従った医療を実践します。
3. 医学及び医療の進歩に必要な研究の実施や倫理的な問題を含むと考えられる医療行為などについては、院外有職者を加えた当院「倫理委員会」において、倫理的・科学的観点から十分検討を行います。

患者の権利

1. **安全で良質な医療を受ける権利**
患者さんは、安全で良質な医療を公平に受けることができます。
2. **十分な情報を知り、説明を得て自己決定する権利**
病状や治療について事実を知り、納得するまで十分な説明を受け、意見を述べることができます。また、他の病院の医師に意見（セカンドオピニオン）を聞くことができます。
3. **選択の自由の権利**
治療方針を十分理解した上で、検査・治療などに、同意・選択・拒否することができます。また、医療施設等を選択することができます。
4. **個人情報と秘密保持に関する権利**
個人情報や医療に関する情報の秘密は守られます。
5. **尊重される権利**
患者さんは、一人の人間として医療現場においても、その生命・身体・人格が尊重される権利を有します。

患者の責務

- 情報を提供する責務
- 医療に協力する責務
- 他の患者さんの治療や療養に配慮する責務





理事長あいさつ

医療法人相生会は、「健全性への貢献」を基本理念に掲げ、経営の根幹は「徳」を基本とし、チームの和、年長者への敬意、個人の能力の育成、個人と組織の方向性の融合等を重視しつつ、情実、年齢等にとらわれない合理的なシステムを構築する「和魂洋才」を基本運営方針としています。それによって患者、被験者、職員の心身の健全性、組織の健全性、さらには地域、社会の健全性の向上に貢献することを目標としており、環境に応じて変革が必要なものは勇敢な判断をもって変革し、守るべきものは時流によらずかたくなに守る勇敢さを持つことを是としています。

1987年博多駅東クリニックを福岡市博多区に開設し、一般診療を、九州臨床薬理研究所を福岡市西区に開設し第1相の治験業務を開始することから始まりました。当時、臨床薬理における安全性の問題への懸念や新薬開発という医学の最先端分野に学問的興味を持ち、九州臨床薬理研究所の開設を決断致しました。現在、30年を経て臨床薬理分野では国内トップクラスの試験実施件数を誇り、その実績は、国内のみにとどまらず海外の製薬会社からオファーを受けるまでになりました。その後、一般診療、介護施設の開設を積極的に展開し、現在は福岡を拠

医療法人 相生会
理事長

入江 伸

点とし、東京、熊本に診療部門として病院5病院5施設、2クリニック2施設、臨床研究部門として6施設、介護福祉部門として4施設を持つ法人まで成長しました。

また、にしくまと病院は、1988年熊本県下益城郡富合町(現 熊本市南区富合町)に開設され2018年に創立30周年を迎える事ができました。地域に根差した医療・介護・福祉を実現するため、1998年富合町に、にしくまもと病院を核にする、こどもからお年寄りまで笑顔で健康で安心して生活できるようなまちを創ると言う「熊本ホスピタウン構想」を策定し、入院や外来、訪問診療を提供する「医療」、居宅介護支援事業所や訪問看護ステーション、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション、サービス付き高齢者向け住宅(特定施設)といった介護サービスを提供する「介護福祉」を実践してまいりました。

2002年医療法人相生会と業務提携を結び、2008年にはその基本方針を共有することで、後発品試験を中心とした臨床試験を実施する臨床薬理センターを新たに開設しました。2014年正式に医療法人相生会に加盟、「医療」「臨床薬理」「介護福祉」の3分野を柱に運営し現在に至ります。

今後、少子高齢化が進む中、医療介護の環



境は人手不足等も含め、非常に深刻な状況に向かっていくことが予測されます。

地域の皆さんに必要な医療や介護が提供できるようAIやロボット等を含めた最新の技術導入も視野に入れ、地域や国際社会の「健全性」に貢献する機関として努力し、変化していく医療環境に柔軟に対応しながら、医療の発展に貢献できる医療法人として最善を尽くす所存でございます。

今後も医療法人相生会、そしてにしくまもと病院に対しましてどうぞよろしくご指導の程お願い申し上げます。



30周年を迎えて

昭和63年(1988)1月18日、西熊本病院は、熊本県下益城郡富合町古閑に、東南産業株式会社(会長：東家嘉幸元衆議院議員)の支援により87床で開院しました。

いく度かの「大きな危機」を迎えましたが、何とか乗り越え存続できましたのも、患者さんやご家族、地域の皆様、関係各位、そして、幾多の困難にもめげず、本院の発展のために貢献いただきました職員の方々、先輩の皆様方のお陰でございます。心より感謝し、お礼を申し上げます。

西熊本病院は初代院長(永山薫造先生：京都大学卒：東洋医学)が3か月で辞められたあと、内科の中川隆一先生が常勤医1人で頑張られました。昭和63年7月に壺井定雄先生(小児科)が院長として就任され、平成2年4月医療法人緑幸会(壺井定雄理事長)が設立されました。私は平成3年1月1日、副院長(整形外科)として西熊本病院に就職しました。医師2名、看護部長は不在で、正看護師は1名、放射線技師や理学療法士、管理栄養士などいませんでした。職員と面談して、「西熊本病院に勤めている事を近所の人に恥ずかしくて言えない、知られたくない」と言われた時はショックでした。11月に、リハビリテーション室と病室(個室など)が増築されました。

医療法人 相生会
にしくまもと病院 病院長 林 茂

平成4年4月に理事長・院長となり、病院名をひらがなの「にしくまもと病院」に改めシンボルマークをつくり、「都市近郊田園型のリハビリテーション病院」をコンセプトにして整形外科の関節鏡手術とリハビリテーションに力を入れました。平成4年11月に萩原直樹先生(外科)を副院長に迎え、病院としての基礎作りが始まりました。平成5年1月に米子ホスピタウンを訪問し、小田貢先生と意気投合して、5月に姉妹提携して「熊本ホスピタウン構想」を策定しました。平成7年3月に社会福祉法人福寿会(理事長林茂)の特別養護老人ホーム「ゆうとびあ」・ケアハウス「アメニティ富合」がオープンしました。医療・福祉・保健と生活の融合体「熊本ホスピタウン」を目指しましたが、平成14年経営不振となっていた東南産業が民事再生法を申請するに至り、にしくまもと病院も存亡の危機に見舞われました。11月に浦江隆次先生を中心とする医療法人相生会(福岡市)と業務提携して何とか乗り越えましたが、社会福祉法人福寿会は別法人となりました。平成16年7月から医療法人緑幸会は小西淳二理事長のもと新体制となりサンエー建設所有の土地建物を買収することができました。平成17年ISO9001の認証取得、平成20年に医療法人緑幸会から相生会に名称変更して臨床薬

The 30th anniversary of establishment



理センターを開設しました。平成20年10月に富合町は熊本市と合併、平成23年3月に九州新幹線全線開通、病院の西側に九州新幹線総合車両所ができ、隣接してJR富合駅もできました。平成24年4月に熊本市が政令指定都市になり富合町に南区役所ができ、同年6月に待望の6階建ての新病棟を増築する事ができました。平成25年9月1日医療法人相生会(入江伸理事長)と正式に合併しました。

平成26年1月に旧介護療養病棟(60床)を改築して特定施設・サ高住ホスピタウンハウス(33室)にしました。

この30年間で病床数は147床になり職員数も400名となり、関節外科センターの手術数も増え、手術のできる地域リハビリテーション病院として認知度も上がってきました。

平成30年6月に地域総合サポートセンターを開設し、ベテラン看護師2人を地域包括支援センターが開設するサロンサポーター養成講座や地域で開催されるサロン等に派遣しています。地域住民との接点を増やし、地域の現状を把握し、表に出てこないニーズ等を掘り起こし、自発的な活動を促し、その活動を支援しながら、患者・家族と医療介護従事者そして行政とが協働して、この地域に必要な地域包括ケアシステム(熊本ホス

ピタウン構想)の構築をすすめてまいります。

山口浩司院長代行を中心とした若い世代が、5月に新しい理念を作り、10月に病院機能評価を受審し、これから2025年に向けた組織改革・質の向上、後継者の育成と病院医療(入院、手術、外来、リハビリ等)の分野に取り組みます。私は熊本ホスピタウン構想の実現に向けて、生活医療(在宅医療、平穏死・看取り、まちづくり)に力を入れていきます。

激動の平成を何とか生き延びてきた、にしくまもと病院の30年を振り返り、けじめをつけ、次の時代に向けて挑戦する、新生にしくまもと病院の出発点とすべく、30周年記念誌を、平成最後の年に発刊する事に致しました。

今後共どうぞよろしくご指導、ご支援の程お願い申し上げます。

稿を終えるに当たりまして、にしくまもと病院のために、多大なお骨折りいただきました、故東家嘉幸元衆議院議員・国土庁長官(東南産業株式会社創業者)、故壺井定雄名誉院長、故東家賢治氏(東南産業株式会社社長)、故辻重喜先生(麻醉科、臨床薬理センター副センター長)に衷心より感謝し、ご冥福をお祈りいたします。



ご祝辞

にしくまもと病院 創立30周年を祝して

熊本県医師会 会長 福田 稠



にしくまもと病院創立30周年、誠におめでとうござ
います。心よりお祝い申し上げます。

にしくまもと病院は、1988年、「西熊本病院」として病
床87床でスタートしておられます。開院当初は医局の
体制が十分でなく運営に御苦労もあった様ですが、
1991年、林茂先生が副院長・整形外科部長として赴
任、翌年には院長に就任、体制を強化され、強いリー
ダーシップで、診療機能の強化に努められました。

さらに、立地をいかして「都市近郊田園型のリハ
ビリテーション病院」をコンセプトに病院名をひらが
なの「にしくまもと病院」に変更されました。1993年
には、米子ホスピタウンと姉妹提携して、熊本ホスピ
タウン構想を策定し、社会福祉法人福寿会を設立、
1995年に特別養護老人ホーム「ゆうとびあ」を開
設され、1997年には、在宅での生活支援のバリア
フリーのモデル住宅である「ユニハウス（自立支援型
住宅）」を敷地内につくり、更に訪問看護ステーション
「きんもくせい」をオープンされました。2000年
には介護保険がスタートしましたが、これにあわせて、
病院（介護療養型医療施設）と理学療法室の改築を
行い、病床数も127床となり、通所リハビリテー
ションれんげ草（定員15名）も開設されました。
又、熊本県より宇城地域リハビリテーションセン
ターの認定も受けておられます。一方、病院経営
体制強化のため、福岡の医療法人相生会と業務
提携し2008年には法人名を「相生会」に改称、
2008年には創立20周年を機に、医療法人相
生会の理念として、「私たちはこころのかよ
った医療をめざします」、品質目標として、
「チェンジ・チャレンジ・チャンス」と定めて
おられます。さらに、林茂院長はじめ、ス
タッフの皆様は、新しい「にしくまもと
病院」にチャレンジするため、「新・熊本
ホスピタウン構想」に取り組まれています。
「健康の里づくり」を目指す富合町にあ
って、医療（にしくまもと病院）を核

とした子供からお年寄まで病気の人も健康な人も一
緒に安心して住めるような医療・保健・福祉の充実
した明るくやさしいバリアフリーの町「熊本ホスピ
タウン」を創ろうと云うものです。

我が国の高齢化の進行はすさまじいものがあり、ま
さしく、団塊の世代の全てが65歳を超える2025年
問題を間近に控えています。かかる中で、国では様
々な施策を展開しております。地域包括ケアシ
ステムの構築は急ピッチですし、一昨年は、地
域医療構想が策定され、昨年4月より、熊本
県の第7次の保健医療計画がスタートして
おります。かかる中で、強く打ち出されて
おりますのは、これまでの医療機関や施設
で行われてきました医療や介護サービスを
地域すなわち在宅に移そうと云う
パラダイムシフトです。「にしくま
もと病院」の熊本ホスピタウン構
想はまさしく、これを受けたもの
で、時宜にかなったものと思われ
ます。林院長初め、にしくまも
と病院の方々には創立30周年を
契機に、まさしく、時代に合っ
た方向性を示されたものと心か
ら敬意を表します。「熊本ホスピ
タウン構想」の成功を心からお祈
り致します。

にしくまもと病院では、ここにめでたく創立30周年
を迎えられました。もとよりこの30年を振り返って
みますと、決してなだらかな道程ばかりではあり
ませんでした。その困難な道程を多くの先達の方
々の御努力、御支援で乗り越えて30年の節目
を迎えられました。林院長先生はじめ病院関係
の皆様のお喜びいかばかりかと拝察し、改め
まして、心よりお祝い申し上げます。にしく
まもと病院におかれましては、これまでの30
年の歴史を礎として、さらに新しい歴史を積
み重ねて頂く事を期待しております。にしく
まもと病院のさらなる発展、繁栄をお祈りし、
お祝いの言葉と致します。

我が師、我が友、我が弟 林 茂先生 そして4人の兄妹

医療法人 社会福祉法人真誠会 小田 貢
理事長



1988年(昭和63年)鳥取県米子市に医療福祉の街ホスピタウン構想で真誠会医院が誕生しました。

と言っても19床の小さな有床診療所と、辻田耳鼻咽喉科、いえはら歯科、ホスピタウン薬局だけのまだまだ未熟な存在でした。

現在では、医療施設がお互いに隣接して医療の町の形態をつくるのは珍しくないのですが、当時は、医療と福祉、そして地域を合体し、市民を巻き込む医療福祉の街ホスピタウン構想は、話題が話題を呼び、地方新聞だけではなく各種の医療雑誌に取り上げられ、実績より話題先行の集まりでした。

1993年(平成5年)、「日経ヘルスケア」の記事を読まれた、林先生が真誠会を訪問されました。その理由は、林先生が、院長に就任したばかりの時期で、にしくまもと病院の建て直しのヒントを得るために、私に会いに来られたのです。

私は当時、ホスピタウン構想という雄大な構想で誕生したとはいえ、87床の病院の院長が、たった19床の診療所に教を請いに来るとは、その謙虚さと度量の大きさに驚き、そして実際にお話をしている林先生の人柄に一目惚れをしてしまいました。

すぐに二人は意気投合し、その後いろいろなプロセスを経て姉妹提携を結び、その後、毎年相互訪問する、いわゆる「ホスピタウン交流会」が始まったのです。

そして、ホスピタウン交流会は、真星病院/神戸(院長 大石麻利子先生)、出石病院/兵庫(元院長 倉橋卓男先生;後に転勤となり、その後も個人としてホスピタウン交流会に参加)も加わり、交流を継続したのです。なかでも年上の私と年下の林先生は兄弟のような強い絆で結ばれ、なおかつ、お互いを競争相手として切磋琢磨してきました。

年齢の順番で言えば、私 小田 貢、林 茂先生、

大石麻利子先生、倉橋卓男先生の順番ですが、まるで仲の良い4人兄妹のように20年以上にわたり、病院経営だけではなく人生について胸襟をひらき話し合い、励ましあってきました。

そして私たちには聖路加国際病院名誉理事長、医療法人真誠会理事長であった故・日野原重明先生(2005年(平成17年)文化勲章授章)が父親のような存在であり、精神的な支えでした。

お互いに訪問する度に、何か新しい活動、あるいは新しい事業を始めることに強い競争意識、競い合い、そしてお互いの仕事ぶりを称え合って、お互いの成長をエネルギーにしてきました。

林先生は、2002年(平成14年)に二度目の病院の危機を乗り越え、2008年(平成20年)146床の立派な病院を建てられました。そして、サ高住にホスピタウンハウスと名付けられました。

一方私は、社会福祉法人部門を拡張し、今では40事業所、そして医療福祉事業体全部で600人の従業員を擁し、米子市全体を真誠会のサービスでカバーできるようになりました。

しかし、このように私が事業を継続的に発展できた理由は、一つに林先生との切磋琢磨であり、私は林先生の兄貴分というプライドでした。

すなわち現在の真誠会、私があるのは、林先生という立派な弟分の存在であり、林先生の存在なくして現在の私も真誠会もなかったのです。林先生に25年前に出会っていなかったら、今でも真誠会は、田舎の小さな医療福祉法人だったと思います。

林先生、本当にありがとうございます。林先生はまさに私にとって、我が師、我が友、我が弟です。

先生の今後の益々のご健勝と、にしくまもと病院の益々のご発展を心よりお祈り申し上げ、にしくまもと病院30周年記念へのお祝いの言葉としたいと思います。

次なる30周年記念のために

医療法人 相生会 浦江 隆次
代表



その日は、九州にしては珍しく大雪でしたが、林先生と私にはしくまもと病院及び医療法人相生会の将来について、いや、そもそもの日本の今後の医療状況はどのようになるかをその後頻りに話し合うことになる思い出の最初の場所、それは、熊本のやや北部に位置する国道沿いのにんじんハウスというレストランにいました。林先生はご自身のホスピタウン構想を熱く語られ、その想いに私は胸を打たれました。

帰りは積雪の為、真っ白になった道路を車がスリップしながらのノロノロ運転で、福岡に帰り着くのは無理ではないかと思うほど、凍結もして先行きの困難を予感させるような林先生との会合の象徴的な初日でした。

しかしながら、私は松下幸之助さんがある高名な禅僧に今後の禅宗はどうなるでしょうか、との質問や、ギリシャ時代の話ですが、テセウスの船は同じ船と言えるか、あるいはトルストイの人生論に出てくる水車を利用して、石臼でいかに美しいパンの材料の小麦粉を作るかを熱心に研究している青年等のことを考えながらハンドルを握りしめていたことを今でも鮮明に記憶しています。

松下幸之助さんの問いに対して高名な禅僧は、「当然、消滅するでしょうな」との淡々とした回答でした。松下幸之助さんは非常に驚かれた様です。また、テセウスの船はあまりにも古くなり、すべての部品が交換されました。すべての部品が交換された船は同じ船と云えるか、との哲学的な問いです。

トルストイに出てくる水車小屋の青年は、徹底してよい小麦粉づくりを追求したため、最後は川の流れや水質の研究にまで及びました。

最初の質問については、当然皆さんも生まれてきたものはいずれ無くなるということは真理だと、理の

部分では思われているでしょうが、実感としてはなかなか持てないとお考えでしょう。

私たちは、自分たちの寄って立つ企業なり、組織を継続させなければならないとの思いは共有していると確信していますが、そのためには、第二の問のように時代が変化すれば、私たちもその時代が必要とするものを提供できる組織へと変わらなければ存続できません。結果として、全く違うものになっている可能性もあります。

また、第三の問題のように存続のためには、priorityに順位をつけざるをえません。

水質の研究よりも、まずは石臼の研究が優先されるべきことです。

常に原点に立ち返りながらも、私達の目的目標は何であったのか、何を現時点では優先しなければならないか、また、中長期的には何を重要視すべきかを考えておかなければならないかを推測、確認し、共有しておくことが必要だと思います。

私たち、医療法人の継続と更なる発展のために、是非とも強く思いを同じくし、協力して参りましょう。

次なる30周年記念のために。



熊本 ホスピタウン 構想

ホスピタウンとは「ホスピタル」と「タウン」をあわせた言葉で、病院やクリニックなどの医療を核にして、その周辺に介護や福祉の施設、住宅等を集めた「住む人にやさしいまち」の事です。

私の構想は、当院の近くにクリニック等ができて、周辺の保育園や幼稚園、小・中学校、高齢者の介護・福祉施設等や地域の人々（患者さんや家族）等が協働して、熊本市南区富合町を医療・福祉・保健の充実した、子どもからお年寄りまで介護が必要になっても最期まで安心して暮らす事のできるまちにしたいというものです。

「熊本ホスピタウン構想」実現に向け、前進します。

病院長 林 茂

熊本ホスピタウン構想

【熊本ホスピタウン構想(平成5年)】

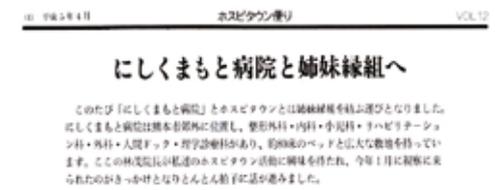
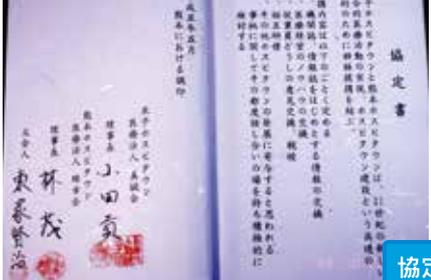
- 熊本市の近郊「健康の里づくり」を目指す富合町に医療(にしくまもと病院)を、核とした子供からおとしよりまで、病気の人も健康な人も、一緒に安心して住めるような、医療・福祉・保健の充実した明るく、やさしいバリアフリーの町「熊本ホスピタウン」を創るというビジョン。
- **バリアフリーの町とは:**道路、住宅などの住環境、生活環境にバリアーがなく、身体の不自由な人、高齢者、妊婦、乳母車利用者、幼児など、みんなが生活しやすい町です。また、人の心にもバリアーがなく、おもいやりがあり、高齢者や障害者、病弱者、そして他の地域から来た人も、わけへだてなく受け入れ、そして包み込んでくれるような、やさしい町です。

【熊本ホスピタウン構想(平成31年)】

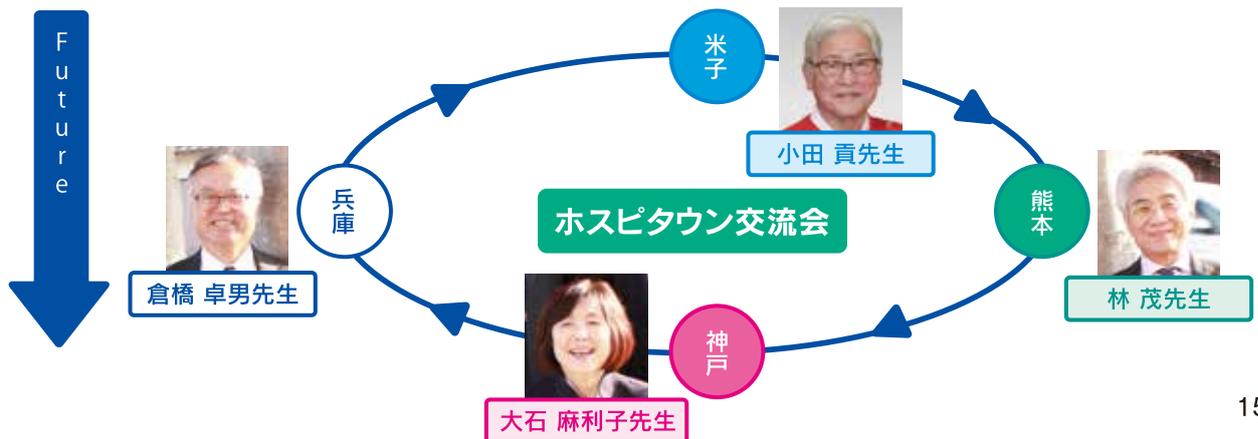
- 熊本ホスピタウンには5つのゾーンがあります
- ① **医療:**にしくまもと病院がハブになる近隣診療所との連携:内科、歯科など
富合メディカルタウン:診療所(眼科、耳鼻科、小児科、在宅診療など)、薬局、訪問看護ステーション、保育所、東洋医学など
- ② **福祉:**特別養護老人ホームゆうとぴあを核とした施設ケア(特養、ケアハウス、グループホームなど)、在宅ケア(訪問・通所介護、自立生活支援・地域包括支援センターなど)
- ③ **保健:**地域保健、学校保健、産業保健、保健・健診センター(メタボ、ロコモ、骨粗鬆症、健康教室、介護教室など)、フィットネス、プールなど
- ④ **生活:**周辺のバリアフリー住環境:疾患対応ホーム(リウマチ、神経難病など)、高齢者賃貸住宅(バリアフリーアパート)、特定施設・サ高住ホスピタウンハウス(平穏死できる家)
- ⑤ **仕事:**高齢でも、体が不自由でも、人の為に何かできる、以前の経験を生かし、何か作る楽しみがあり、少しでも収入になる(生き甲斐センター、ふれあい農園、福祉工場など)



■ホスピタウン交流会のあゆみ

<p>1993 平成5年1月</p> <p>第1陣 米子訪問 林院長・後藤事務長参加</p>	  <p>第1陣米子訪問。平成5年1月14日</p> <p>「日経ヘルス」に米子ホスピタウンの記事掲載される。</p>
<p>1993 平成5年4月</p> <p>第2陣 米子訪問 萩原副院長・山田課長 他4名参加</p>	   <p>第2陣米子訪問写真</p>
<p>1993 平成5年5月</p>	<p>米子ホスピタウンと姉妹提携 提携調印式の開催と協定書の策定。</p>  <p>熊本ホスピタウン構想を策定。</p>  <p>提携調印式</p> <p>協定書</p>
<p>1996 平成8年11月 第1回(米子)</p>	<p>第一回ホスピタウン交流会 (21世紀の新しい総合的医療活動の実現、ホスピタウン建設)</p>  
<p>1997 平成9年9月 第2回(熊本)</p>	 <p>第2回ホスピタウン交流会集合写真</p>
<p>1998 平成10年10月 第3回(米子)</p>	<p>医療法人真誠会(米子)と医療法人緑幸会(熊本)に加え、真星病院(神戸)も姉妹提携へ</p>
<p>1999平成11年11月第4回(神戸)・倉橋先生参加</p> <p>2000平成12年10月第5回(熊本)</p>	
<p>2001 平成13年11月 第6回(米子)</p>	<p>公立出石病院(兵庫)とグリーンアルム総合施設(長野)も姉妹提携。ホスピタウンファミリー全国5グループへ</p>  <p>ホスピタウン・ファミリーは全国5グループに</p>
<p>2002平成14年10月第7回(出石)</p> <p>2003平成15年11月第8回(長野)</p> <p>2004平成16年11月第9回(神戸)</p>	

<p>2005 平成17年11月 第10回(熊本) テーマ:「新たなスタート」 ～これまでの十年・ これからの十年～</p>	 	 <p>交流会では全員で 牛深ハイヤ踊り</p>
<p>2006 平成18年11月 第11回(米子)</p>	<p>テーマ:「ONLY1 NO.1を目指して」</p>	
<p>2007 平成19年11月 第12回(神戸)</p>	<p>テーマ:「職員全員が参画する病院・施設運営」「職員教育、人”財”育成」</p>	
<p>2008 平成20年11月 第13回(熊本) テーマ:「看取りについて」</p>		 <p>施設の昼食を試食。</p>
<p>2009 平成21年11月第14回(米子) 2010平成22年10月第15回(神戸) 2011平成23年 開催なし(東日本大震災の為)</p>		
<p>2012 平成24年11月 第16回(熊本) テーマ:「2025年に勝ち 残るための体制の構築」</p>		
<p>2013 平成25年11月第17回(米子) 2014 平成26年10月第18回(神戸)</p>		
<p>2015 平成27年11月 第19回(熊本) テーマ:「地域包括ケア～ 住み慣れた町で…～」</p>	 <p>第19回ホスピタウン交流会熊本集合写真</p>	 <p>皆でお出迎え</p>
<p>2016 平成28年11月 第20回(米子)</p>	<p>テーマ:「ホスピタウンの原点 地域と共に歩むホスピタウン」</p>	
<p>2017 平成29年10月第21回(神戸)</p>		
<p>2018 平成30年11月 第22回(米子) テーマ:「にしくま30年、 真誠会30年、真星38年 これからの20年どう生き るか 何を残すか」</p>		 <p>第22回ホスピタウン交流会 米子</p>





病院概要
施設基準
組織図
フロア図

■ 病院概要

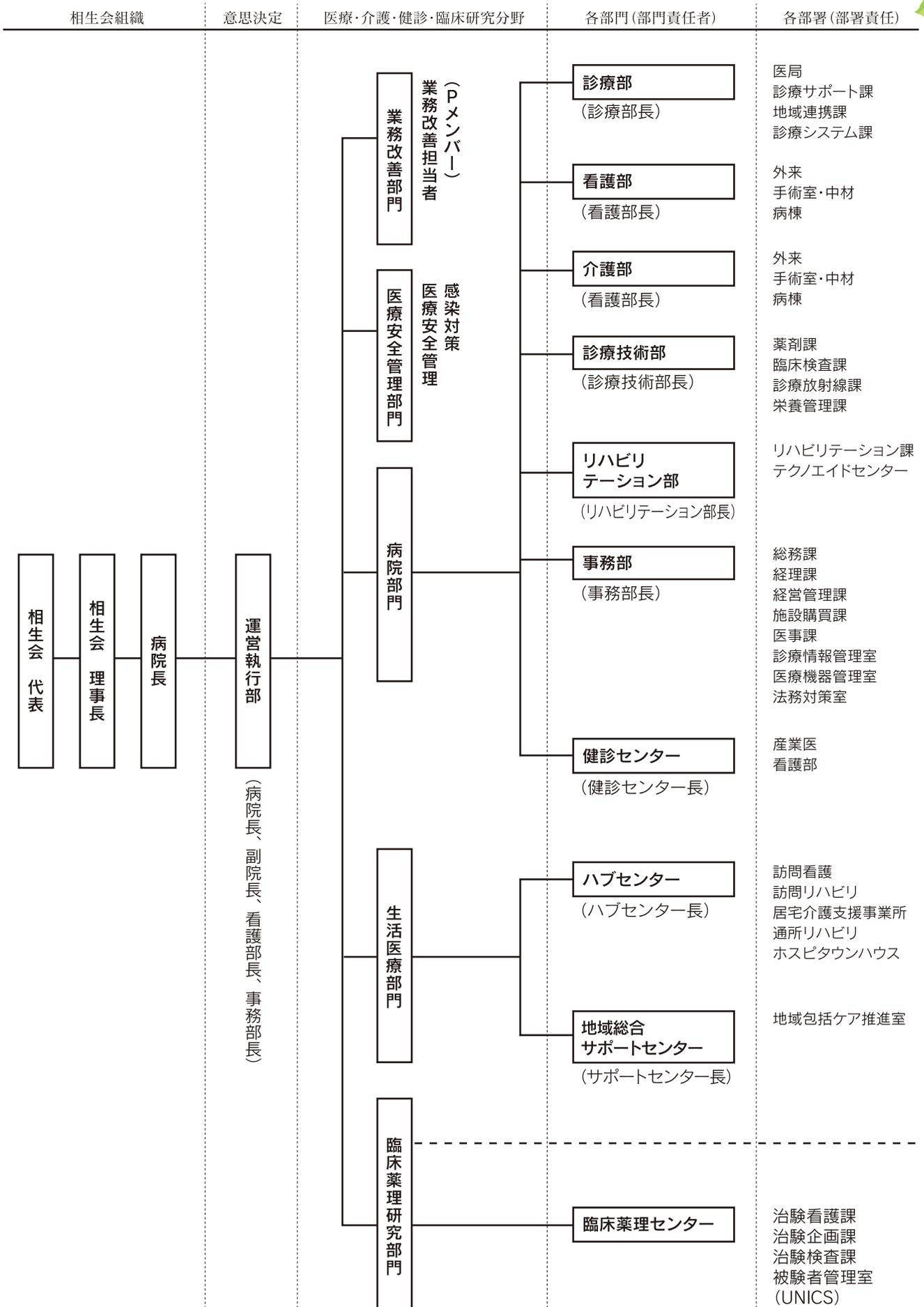
名 称	医療法人相生会 にしくまもと病院
設立	1988年1月18日
開設者	入江 伸
管理者	林 茂
所在地	〒861-4157 熊本市南区富合町古閑1012
電話	096-358-1118
FAX	096-358-1099
診療科目	整形外科・内科・糖尿病/代謝内科・脳神経内科・脳神経外科・消化器内科・呼吸器内科・外科・麻酔科・皮膚科・泌尿器科・循環器内科・リハビリテーション科
病床数	全146床 3階病棟(回復期リハビリテーション病棟) 36床 4階病棟(地域包括ケア病棟) 38床 5階病棟(一般病棟・関節外科センター) 38床 6階病棟(地域包括ケア病棟) 34床
検査機器	X線診断装置・X線透視診断装置・全身用ヘリカルCTスキャナー(16列)・MRI・骨密度測定装置・関節鏡ファイバースコープ・内視鏡ファイバースコープ(上部・下部)・脳波計・心電計・脳波検査装置・超音波診断装置(頸・心・腹)・肺機能検査装置・生化学自動分析装置・血液自動分析装置・血圧脈派検査装置・尿自動分析装置・尿流測定器・残尿測定器(ブラダースキャン)・尿流動態検査装置・24時間自動血圧測定器・ホルター心電計・眼底カメラ・麻酔器・AED・除細動器・人工呼吸器
面会時間	平日・土曜 午後2時～午後8時 日・祝 午前10時～午後8時
関連施設	通所リハビリテーションれんげ草・訪問看護ステーションきんもくせい 訪問リハビリテーション・指定居宅介護支援事業所・地域総合サポートセンター(特定施設)サービス付き高齢者向け住宅ホスピタウンハウス 臨床薬理センター
認定施設	病院総合医育成プログラム認定施設 公益社団法人 日本リハビリテーション医学会研修施設 公益社団法人 日本整形外科学会専門医研修施設 一般社団法人 日本経腸栄養学会NST稼働施設 熊本大学医学部医学科 臨床教育学外協力施設
職員数	医師18・薬剤師9・管理栄養士4・放射線技師3・臨床検査技師18・社会福祉士5 看護師143・介護福祉士26・介護職28・理学療法士37・作業療法士26・言語聴覚士7 歯科衛生士2・臨床工学技士1・義肢装具士1・ケアマネージャー 8・事務系職員82 合計418名

■ 施設基準

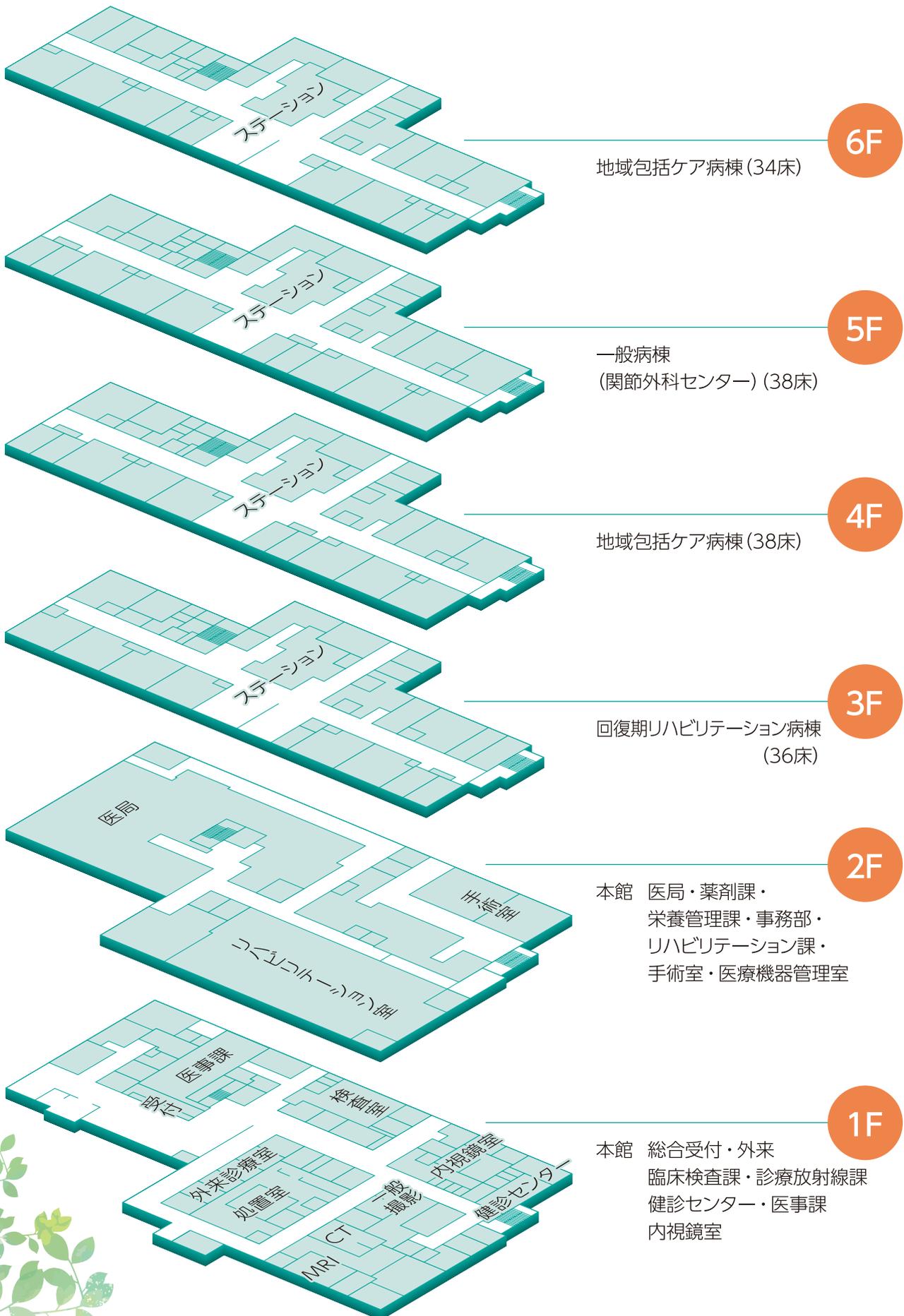
平成30年12月1日

一般病棟入院基本料(急性期一般入院料7)
診療録管理体制加算2
医師事務作業補助体制加算1
療養環境加算
療養病棟療養環境加算1
感染防止対策加算2
後発医薬品使用体制加算2
病棟薬剤業務実施加算1
データ提出加算1
地域包括ケア病棟入院料1 看護職員配置加算・看護補助者配置加算
回復期リハビリテーション病棟入院料1
体制強化加算1
入院時食事療養/生活療養(Ⅰ)
がん性疼痛緩和指導管理料
がん治療連携指導料
薬剤管理指導料
医療機器安全管理料1
在宅療養支援病院3
在宅時・施設入居時等医学総合管理料
検体検査管理加算(Ⅰ)
検体検査管理加算(Ⅱ)
神経学的検査
CT・MRI撮影
脳血管疾患等リハビリテーション料(Ⅰ)
運動器リハビリテーション料(Ⅰ)
呼吸器リハビリテーション料(Ⅰ)
がん患者リハビリテーション料
骨移植術(軟骨移植術を含む)(自家培養軟骨移植術に限る)
膀胱水圧拡張術
胃瘻造設術
輸血管理料Ⅱ
輸血適正使用加算
胃瘻造設時嚥下機能評価加算
入退院支援加算1
手術の通則の5及び6に掲げる手術
酸素の購入価格に関する届け出

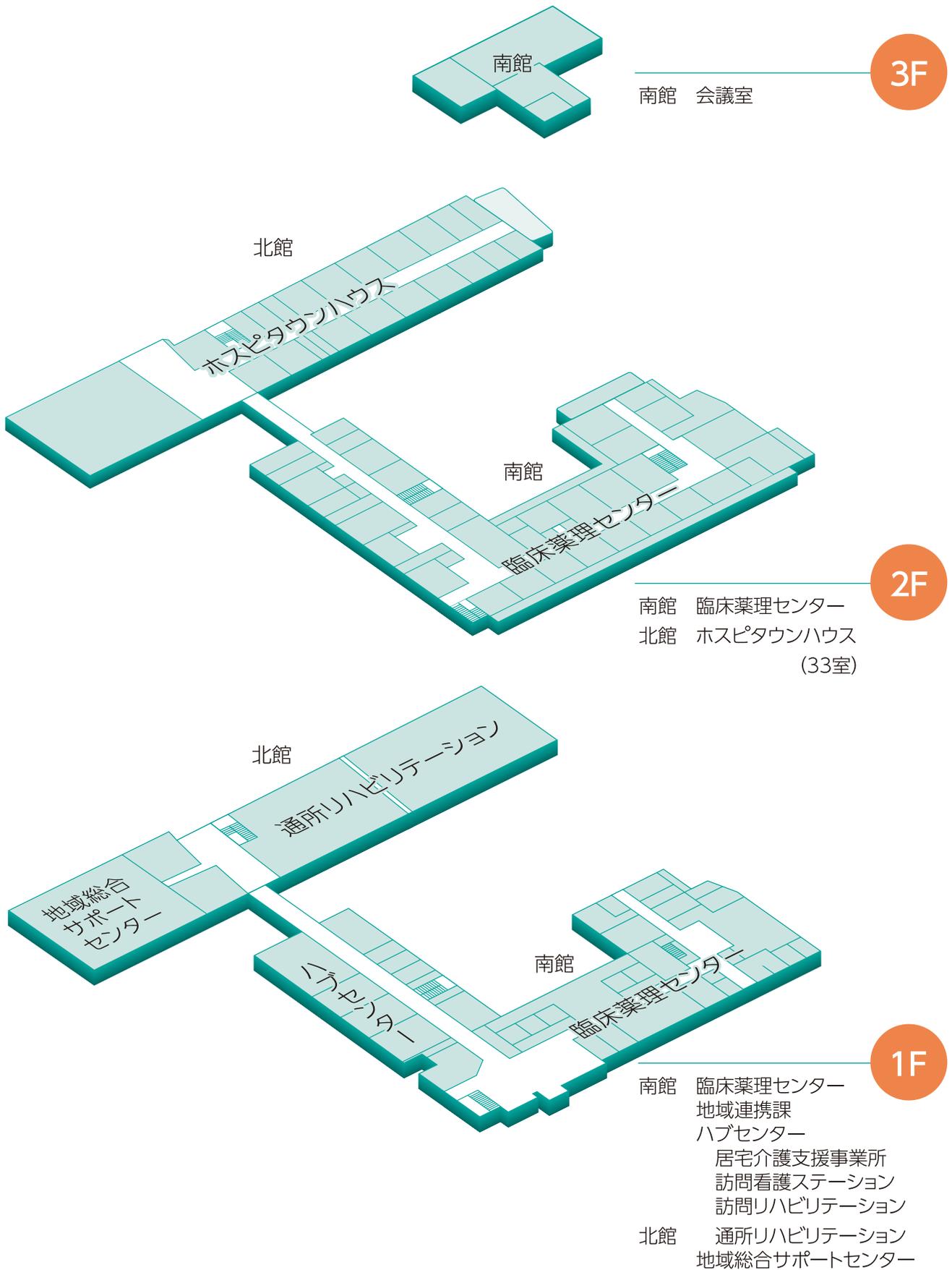
組織図



■フロア図 本館



■フロア図 南館・北館

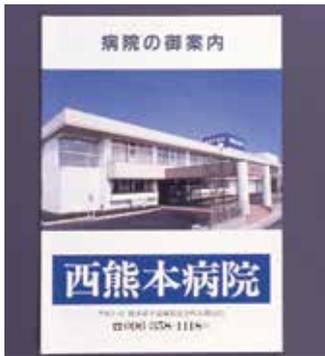




にしくまもと病院の
あゆみ



にしくまもと病院のあゆみ



昭和63年開院

西熊本病院
↓
にしくまもと病院へ
平成4年4月



新病棟建設地鎮祭



新病棟建築工事開始平成23年5月23日



病院医療

本館

平成24年5月20日完成



外来ロビー



生活医療

北館



南館

臨床薬理センター



にしくまもと病院の30年

1987年～1992年

年号		院内のできごと		院内外のできごと
1987年 (昭和62年)	1月	西熊本病院 起工式		
1988年 (昭和63年)	1月	西熊本病院 (87床) 開院 永山薫造 (内科) 院長 出資：東南産業株式会社 会長 東家嘉幸衆議院議員 建物：サンエー建設株式会社所有		
	4月	中川隆一 (内科) 就職		
	7月	2代目病院長 壺井定雄 (小児科) 就任		
1989年 (平成元年)	1月	基準看護・基準給食・基準寝具		
1990年 (平成2年)	2月	医療法人緑幸会認定 壺井定雄理事長 理事：宮本保輝・中川隆一・向 良扶 東家賀治・廣瀬憲成・柴垣昭三 監事：河喜多維保		
	3月	病院開設許可 特例許可病床 54床 一般病床 33床 西熊本病院院是策定		
1991年 (平成3年)	1月	林 茂 (整形外科) 副院長就任	12月	第一回 クリスマス会
	5月	労災保険指定医療機関認定		
	11月	リハビリテーション棟 落成式 		
1992年 (平成4年)	1月	関節鏡友の会発会式 帝京大学整形外科助教授 陳 永振先生講演	7月	関節鏡友の会・七夕会
	4月	2代目理事長・3代目院長 林 茂就任 基準看護承認 「にしくまもと病院」へ改称 	12月	第1回にしくまもと病院杯グランドゴルフ大会 
	6月	理学療法Ⅱ 取得		
	11月	萩原直樹 (外科) 副院長就任		

年号	院内のできごと		院内外のできごと	
1993年 (平成5年)	5月	米子ホスピタウン姉妹提携 	4月	第9回街頭無料健康相談（熊本県保険医療協会）に参加 以降毎年参加  街頭無料健康相談
	12月	労災保険指定	9月	第1回にしくまもと病院祭開催
1994年 (平成6年)	4月	病床変更 特例許可病床から介護力強化病床に変更	1月	社会福祉法人福寿会設立発起人会 理事長 林 茂
	7月	20床増床（87床→107床） （介護力強化病床54床・一般病床33床→53床）	2月	特別養護老人ホーム起工式
	10月	新看護体制3対1（A）加算	5月	第3回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
1995年 (平成7年)	 社会福祉法人福寿会ゆうとびあ 特別養護老人ホーム 50床 短期入所生活介護 20床 ケアハウスアミニティ富合 30室		9月	第2回にしくまもと病院祭
			10月	第4回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			3月	特別養護老人ホーム「ゆうとびあ」開設 施設長 森川富士夫就任 総合老人福祉施設ゆうとびあ 落成式
			4月	ケアハウス「アミニティ富合」開設
			5月	第5回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			9月	第1回ホスピタウン祭り
1996年 (平成8年)		 とみあい薬局	10月	第6回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			5月	第7回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			8月	医薬分業（院外処方発行）とみあい薬局開業
			9月	第2回ホスピタウン祭り
			10月	第8回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			11月	関節鏡友の会旅行（天草）
			7月	ユニハウス研究会発足会
			9月	ユニハウス地鎮祭 7床増床（107床→114床） （介護力強化病床54床・一般病床53床→60床）
			10月	4代目院長 萩原直樹就任

年号	院内のできごと		院内外のできごと	
1997年 (平成9年)	2月	バリアフリー体験施設「ユニハウス」落成式 (魚住熊本県副知事・上田富合町長・ 高木熊本大学整形外科教授) 	5月	第9回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
	10月	訪問看護ステーション「きんもくせい」開所	9月	第3回ホスピタウン祭り 関節鏡友の会旅行 (阿蘇)
	11月	家庭介護者教室 きんもくせいオープン記念講演会	10月	第10回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
1998年 (平成10年)	1月	大熊由紀子朝日新聞論説委員「ユニハウス」見学 	5月	にしくまもと病院開設10周年記念式典
			9月	第11回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			10月	第4回ホスピタウン祭り 第12回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
1999年 (平成11年)	7月	にしくまもと病院増築工事起工式	5月	第13回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
			9月	第5回ホスピタウン祭り
			11月	第14回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2000年 (平成12年)	1月	コンピューター2000年問題対応		
	4月	13床増床 (114床→127床) 一般病床 (60床→87床) 介護力強化病床を療養病床へ (40床) 病棟竣工落成式 (上田富合町長・東宇城保健所長・ 高木熊本大学整形外科教授・ 深迫下益城郡医師会会長)		
	5月	病床変更 一般病床47床を療養病床へ 療養病床40床を介護療養型医療施設へ	9月	第6回ホスピタウン祭り
	9月	通所リハビリテーションれんげ草開所 (15名) 宇城地域リハビリテーション広域支援センター指定	11月	第15回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2001年 (平成13年)	7月	総合リハビリテーション施設認定 (熊本県・県議会厚生常任委員会視察)	9月	第7回ホスピタウン祭り
			11月	第16回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会

年号	院内のできごと		院内外のできごと	
2002年 (平成14年)	6月 11月	言語聴覚療法Ⅱ 取得 医療法人相生会と業務提携	9月 10月 11月	第8回ホスピタウン祭り 東南産業株式会社民事再生法により申請 第17回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2003年 (平成15年)	2月	病床数及び病床変更 療養病床→回復期リハビリテーション43床 一般病床 (40床→44床)	9月 11月	第9回ホスピタウン祭り 第18回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2004年 (平成16年)	7月 12月	医療法人相生会 新体制 3代目理事長 小西淳二 5代目院長 林 茂 事務部長 松永龍太郎 にしくまもと病院の建物と土地をサンエー建設より取得	10月 11月	第10回ホスピタウン祭り 第19回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2005年 (平成17年)	3月 4月 11月	ISO本審査受審 ISO 9001 認証取得  通所リハビリテーションれんげ草拡張 15名→40名 通所リハビリテーションれんげ草内覧会 村崎富合町長挨拶 	9月 11月	第11回ホスピタウン祭り 第20回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会 
2006年 (平成18年)	2月 8月	富合町地域包括支援センター受託 通所リハビリテーションれんげ草拡張 40名→60名	9月 11月	第12回ホスピタウン祭り 第21回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会

年号	院内のできごと		院内外のできごと	
2007年 (平成19年)	11月	臨床薬理センター地鎮祭 	9月 11月	第13回ホスピタウン祭り 第22回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会  グランドゴルフ大会
2008年 (平成20年)	4月	医療法人緑幸会から医療法人相生会へ法人名変更 臨床薬理センター及び病棟増築 19床増床 (127床→146床) 一般病床44床 回復期リハビリテーション (44床→42床) 介護療養型医療施設 (40床→60床)	9月 10月 11月	第14回ホスピタウン祭り 富合町が熊本市に編入 第23回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2009年 (平成21年)			11月	第24回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2010年 (平成22年)	2月 3月 11月	マルチスライスCT (16列) 導入 一般病棟と回復期病棟病床数変更 (一般34床→42床・亜急性期10床→8床 回復期42床→36床) 一般病棟病床数変更 (一般42床→38床・亜急性期8床→12床)	3月 8月 9月 11月	第1回部署目標達成報告会 新幹線車両基地完成見学会  車両基地完成見学会 第15回ホスピタウン祭り 第25回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会
2011年 (平成23年)	2月 5月 9月 11月	ISO認証審査 (更新) 新病棟建設 地鎮祭 第2臨床薬理センター 地鎮祭  第2臨床薬理センター完成	3月 11日 9月 11月	第2回部署目標達成報告会 11日 東日本大震災 九州新幹線全線開通 JR富合駅新設  第16回ホスピタウン祭り 第26回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会

年号	院内のできごと	院内外のできごと
2012年 (平成24年)	<p>1月 電子カルテシステム導入</p> <p>3月 ISO認証審査 (更新)</p> <p>5月 新病棟内覧会</p> <p>6月 1日(金)新病棟へ引っ越し 病床数変更 一般病棟 50床→80床 (亜急性期16床) 回復期リハビリ病棟 36床 介護療養型医療施設 30床</p> <p>4日(月)新病棟での外来診察開始 健診センター開設 MRI導入</p>	<p>4月 熊本市政令指定都市富合町に南区役所 </p> <p>10月 医療マネジメントセミナー (アスパル富合) テーマ: 「平穏死」石飛幸三先生 </p> <p>11月 第27回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p>
2013年 (平成25年)	<p>1月 京セラ式病院原価管理手法 運用開始</p> <p>3月 ISO認証審査 (更新)</p> <p>4月 院内保育所「ホスピタウンKIDS」開園</p> <p>7月 ホスピタウンハウス開設工事安全祈願祭</p> <p>9月 医療法人相生会と正式合併</p> <p>10月 病床変更 介護療養型医療施設30床→医療療養病床</p> <p>12月 ホスピタウンハウス内覧会</p>	<p>2月 熊本県在宅療養支援体制モデルづくり事業 「熊本ホスピタウン・みとりネット」 主催市民公開講座</p> <p>7月 京セラ式病院原価管理手法ヒヤリング</p> <p>9月 京セラ式病院原価管理手法マスタープラン発表会</p> <p>11月 第28回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p> <p>12月 第17回ホスピタウン健康祭り</p>
2014年 (平成26年)	<p>1月 特定施設サービス付き高齢者向け住宅 ホスピタウンハウス開設 (定員33名) </p> <p>5月 病床変更 一般病床80床を地域包括ケア病棟・一般病棟に分離 一般病棟 40床 地域包括ケア病棟 (4階) 40床</p> <p>9月 回復期リハビリ病棟入院基本料 I 取得</p>	<p></p> <p>10月 第18回ホスピタウン健康祭り</p> <p>11月 第29回熊本ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p>
2015年 (平成27年)	<p>6月 病床数変更 一般病床・地域包括ケア病床各40床→38床 医療療養病床 (30床→34床)</p> <p>11月 平成27年度 熊本県男女共同参画推進事業者表彰受賞 </p>	<p>8月 25日 台風15号 停電・発電機被害</p> <p>10月 第19回ホスピタウン健康祭り</p> <p>11月 第30回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会 </p>

年号	院内のできごと	院内外のできごと
2016年 (平成28年)	<p>4月 14日 熊本地震 震度7 発生 16日 熊本地震 震度7 発生</p>  <p>薬剤課の被害状況</p>  <p>防災対策本部会議</p>	<p>2月 下益城郡医師会主催：在宅医療・地域フォーラムIN宇城</p>  <p>大西熊本市市長参加</p> <p>9月 第20回ホスピタウン健康祭り</p> <p>11月 熊本地震記念誌発行</p>  <p>第31回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p>
2017年 (平成29年)	<p>9月 病床変更 医療療養病棟から地域包括ケア病棟（6階）34床</p>	<p>5月 関節鏡3,000例、人工関節300例達成 にしくまもと病院感謝の集いを開催（アスパル富合）</p>  <p>9月 第21回ホスピタウン健康祭り</p> <p>11月 第32回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p>
2018年 (平成30年)	<p>1月 地域包括ケア病棟工事開始 3月 地域包括ケア病棟完成 6月 地域総合サポートセンター開設</p> <p>10月 26・27日 病院機能評価受審</p>	<p>9月 第22回ホスピタウン健康祭り</p>  <p>11月 第33回ホスピタウン杯グランドゴルフ大会</p>
2019年 (平成31年)	<p>1月 19日 にしくまもと病院 連携フォーラム2019 (済生会熊本病院 外来がん治療センター)</p> <p>2月 1日 病院機能評価認定 「一般病棟1」及び「リハビリテーション 病院（副）」が認定される</p>	

病院機能評価 認定取得

病院機能評価とは、組織全体の運営管理および提供される医療について、日本医療機能評価機構が中立的、科学的・専門的な見地から評価を行うツールです。

当院は、①組織運営を再構築し継続の第一歩とする、②にしくまもと病院の職員であることの誇りを持つ、③現状を謙虚に受け入れて成長する、④後継リーダーの育成を目的に、平成30年10月26日、27日に病院機能評価(3rdG: Ver.2.0)を受審し、平成31年2月1日に「一般病院1」「リハビリテーション病院(副)」の認定を取得しました。



今回の受審の結果を通して見えた課題を踏まえ、今後も病院理念に則った質の高い医療・ケアが提供出来るよう、継続した改善活動に取り組んでいきたいと思っております。



地域との輪
職員の輪

地域との輪

地域の方と一緒に



(メインステージ)



(健康チェック)

ホスピタウン祭り



グランドゴルフ大会

地域へ参加



街頭無料健康相談



南区いきいきフェスタ



新幹線フェスタ

予防教室



糖尿病教室



骨粗しょう症教室



健康教室

地域の医療・関連施設と勉強会(にしくまカフェ)



講話(看取りについて)



感染対策(吐物処理)

季節の行事



敬老会



豆まき



通所リハビリテーション利用者の作品展

職員の輪



職員旅行（宮島）



バドミントンチーム



互助会主催の食事会



新入職員歓迎会



忘年会



にしくま野球チーム

院内職員研修



新人看護師研修終了式



新人職員研修



AED 研修



パス大会



放課後塾



新人看護師リフレッシュ研修



CS 委員会主催 外部講師による接遇研修



研修委員会・新人職員フォロー研修

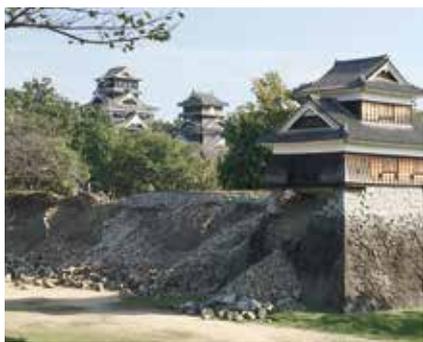
熊本地震



「熊本地震 にしくまもと病院の記録」を発行

熊本地震

(前震:平成28年4月14日午後9時26分/震度7)
(本震:平成28年4月16日午前1時25分/震度7)



天守閣の瓦が崩落 (熊本城)



全壊した民家



湧水量が減り干上がった水前寺公園



薬品棚から薬品が散乱



事務所の棚



敷地内の路面に亀裂



医局の図書全滅



第一回目防災会議



毎日集まり防災会議



外来待合室を地域の方々へ開放



食事配膳は人海戦術



紙コップに紙皿…温かいご飯感激!



リハビリ室で待機する職員

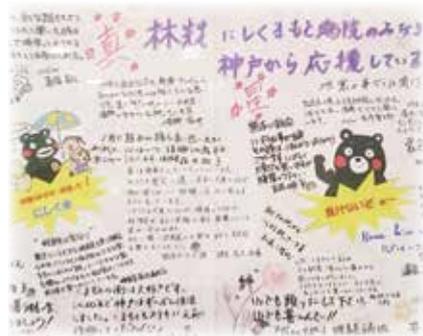


ホスピタウンハウス入居者の方が一時避難→臨床薬理センターへ





姉妹提携医療機関（医療法人真誠会・医療法人社団まほし会）からの寄せ書き



相生会 宮田病院より救援物資届く



避難所へ訪問



エコノミー症候群予防：皆で体操

地域に出向きました



避難所アスバル富合訪問



自衛隊待機所



仮設住宅訪問



仮設住宅の集会場へ



仮設住宅で元気になる 100 歳体操!!



職員の子供一時預かり



ご支援頂きありがとうございました



にしくまもと病院の
＊ 取り組み

■関節外科センター

センター長・院長代行 山口 浩司

にしくまもと病院では平成26年から関節外科センターを開設しております。

林茂院長が単身で東京へ、陳先生に師事したところにルーツを持つ当院の関節外科の歴史は平成3年に始まりました。関節鏡を用いた手術は小侵襲で、痛みが少なく社会復帰も早いことが多くの患者さんに喜ばれていました。平成初期まで関節リウマチは現在のような有効な薬物療法が少なく、小侵襲で成果を上げる関節鏡視下手術は患者さんに寄り添う手段の最たるものでもありました。林院長は「覗いたことのない関節はなかった。」と当時を振り返ります。

人工関節置換術の需要が飛躍的に伸びている現在、重労働や激しいスポーツで痛めた末の進行期の変形性関節症や治療に難渋した関節リウマチ症例などに対して、当院でもその症例数は年々と増えてきています。平成29年には「感謝の集い」を開催するに至り、多くの患者さん、ご家族にお越し頂きました。

患者さん目線の術後成績が重要視されるようになった現在、満足度の面で妥協が許されなくなってきております。人工関節の再手術への対応、低侵襲な単顆型の人工膝関節置換術、低侵襲の人工股関節置換術、金属アレルギー症例への対応、平成28年から開始した両側同時人工関節置換術など、症例に応じてできる限りの対応を行っております。患者さんの求めるADLを獲得できるように更なる努力を継続しなければならないと考えています。

関節外科センターではクリニカルパスを使用

することで、患者さんには不安なく手術を受けていただけるよう努力しております。外来から入院、退院後の生活に至るまで、スタッフは治療の標準化、最新化を日々行えるようクリティカルパスの運用を継続しております。

高齢化社会に伴う関節疾患は生活習慣と密接に関わっており、骨粗鬆症対策を無視できないのが現状です。人工関節症例においての骨粗鬆症介入は全例に行っております。

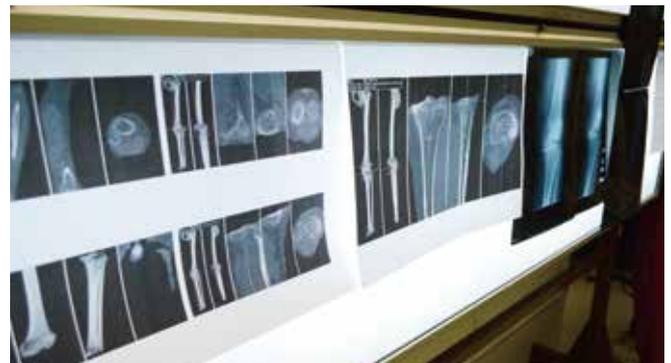
その他、靭帯再建術などスポーツ外傷や障害の症例、慢性疾患で人工関節以外の対応では骨切り術の症例も増加しています。

医師をはじめ各職種が積極的に学会活動や、健康教室などを通して、最新の知見の発信に努めております。人工関節、骨粗鬆症、クリニカルパスなどの分野では毎年全国学会への発表を行っております。

現在コンピュータ支援手術は全盛へ向かって進んでいるようです。当院でもコンピュータ解析による3Dテンプレートを用いての人工関節置換術の術前計画を平成27年から導入し、より正確な手術を提供できるようになっております。ナビゲーションやAIによる支援手術など今後さらなる進歩の波にのって行くことが求められるでしょう。

激変を続ける環境の中で医療人として持つべき志は変わることはありません。私たちは先人の志を次の世代へ繋いでいく責務があります。

一つ一つの症例を確実に、関節を診る前に疾患を、疾患を診る前に患者さんを診ることを大切に、診療にあたらなければならないと思っています。



■多職種連携による病院から在宅に向けた取り組み ～生活につなぐ～

セラピスト課 課長 青山 和美

「対象者が望む生活」を支援するリハビリテーションにおいては、患者自身が主体となって治療に臨むことを多職種のチームにて支えます。そのため、入院初日もしくは早い段階で、患者や家族より“退院後の生活に対する思い”を聴かせていただき、各専門職の評価も併せてニーズを整理し、患者・家族を含めたチームとして取り組んでいきます。

また、入院期間の短縮化に伴い、生活行為が十分に安定・安心するまでの入院治療は困難となってきました。退院後を支援する関係者へ、生活目標や禁忌事項をシームレスに引き継ぐことを心掛けております。特に、移動や排泄・入浴および食形態や嚥下状態は、在宅で生活できるか否かに影響するため、多職種による自宅環境調査や介護支援専門員・サービス事業所等との担当者会議、ならびに自宅での動作確認等を積極的に実施しています。

多職種カンファレンス・担当者会議

関係職種が情報を持ち寄り、患者の目標設定や進捗状況について、入院から1週以内、その後は月1回以上の頻度で話し合います。退院前には、患者・家族および退院後の生活を支援する関係者との会議も行います。



入浴評価

介助が必要な場合は、必ずセラピストが初回入浴時に評価を行い、“入浴申送り表”を用いてケアワーカーへ介助のポイント等を伝達しています。

入浴申送り表

<特記事項・禁忌>		<環境設定>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> シャワーのみ <input type="checkbox"/> 浴槽 (浴槽位置: 真・手前・両方) <input type="checkbox"/> 浴槽白 <input type="checkbox"/> バスボード <input type="checkbox"/> シャワーキャリー <input type="checkbox"/> シャワーチェア (肘かけ: 有・無)
着衣	上衣 座位・立位 (介助・見守り・自立) : 下衣 座位・立位 (介助・見守り・自立) :	
浴室内移動	車椅子 → シャワーキャリー → 歩行 (方法:)	
洗髪・洗髪	座位・立位 (介助・見守り・自立) :	
浴槽移動	座位・立位 (介助・見守り・自立)	
着衣	上衣 座位・立位 (介助・見守り・自立) : 下衣 座位・立位 (介助・見守り・自立) :	

生活行為の定着

移動や摂食動作等は、訓練による動作安定後、セラピストから看護師やケアワーカーへ引き継ぎ、より安心・安全な自室での生活行為に向け病棟生活の中で定着させていきます。



家屋等の環境調査や動作確認

入院早期に自宅や周辺環境を確認し、各々に応じた訓練を行います。

さらに退院までに、生活の場での階段昇降や調理・買い物・バスや公共交通機関の乗降等が安全に行えるか確認します。



自宅にて入浴動作の確認



部署紹介
職員紹介

診療部



整形外科

整形外科は、運動器の病気やケガを扱う診療科であり、四肢の骨、筋肉、関節のほか、脊椎、末梢神経も対象となります。

当院では、骨折や捻挫などの外傷、変形性関節症や変形性脊椎症、骨粗鬆症、関節リウマチなどの診療にあたっております。関節鏡視下手術や人工関節置換術、スポーツに関わる外傷や障害の手術治療を数多く行っております。熊本大学医学部附属病院、済生会熊本病院など高度急性期病院との連携も密に行なっております。

関節外科センター

関節外科センターでは、従来から行っていた関節鏡視下手術に加え、コンピュータ解析による人工関節置換術の術前計画により正確な手術を提供、また両側同日人工関節置換術も行っております。その他スポーツ障害の手術症例も増加しており、予防やセルフケア指導の重要性も感じております。日常生活の指導からリハビリテーションを中心とした保存的療法、さらには手術療法、術後のケアまで総合的な治療の提供を目指しております。

脳神経内科

脳神経内科は、入院では急性期脳血管疾患治療後、回復期リハビリ病棟でのリハビリや再発予防のための全身管理を中心に行っています。パーキンソン病や脊髄小脳変性症等で運動機能が悪化した患者さんの短期入院・集中リハビリ等も行っています。外来では脳卒中後の慢性期の経過観察・再発予防やパーキンソン病、頭痛、めまい、物忘れなどの他、頻度の高い神経疾患に関しても診断・治療を行っています。

脳神経外科・リハビリテーション科

脳神経外科は、平成30年4月より開始となりました。現在は、主に脳卒中(脳梗塞・脳出血・くも膜下出血)や頭部外傷で回復期リハビリテーション病棟に入院となった方々の診断・治療を行っています。また、退院後の再発予防のための外来診療も行っています。

平成31年4月からは新たに1.5TのMRIの導入が決まりましたので、今後は外来診療を拡大し、再発予防や脳卒中発症予防の治療にも力を入れていく予定です。

糖尿病 / 代謝内科

糖尿病/代謝内科では、糖尿病・高血圧などの生活習慣病及び一般内科の診療を行っています。糖尿病は合併症による失明、人工透析導入、心筋梗塞発症等が問題になっています。新薬により多様な治療が可能になりましたが、治療の基礎は食事・運動など生活習慣の是正です。当科では、治療の一環として医師・栄養士・看護師・薬剤師・理学療法士・臨床検査技師による食事・生活習慣指導を行い、隔月の糖尿病教室や糖尿病教育入院も行っています。

消化器内科

消化器内科では、腹痛、吐き気、便秘、下痢などの腹部症状を中心に診断、治療を行っています。また、胃がん、大腸がんなど心配な方には、胃カメラや大腸内視鏡、腹部超音波検査による検査・診断を行っています。

健診センター

健診センターでは、人間ドック・企業健診・個人健診を行っています。健康寿命を短くする一番の原因は、生活習慣病です。生活習慣病には、循環器疾患や代謝性疾患など状態が悪化するまで症状がありません。生活習慣病を早期に発見し、治療につなげるのが健康診断です。

また対象者には生活習慣病にならないように保健指導も行っています。当センターではより早い段階で病気を発見し、早期に治療できるように取り組んでいます。

呼吸器内科

呼吸器内科では、肺・気管支炎・胸膜など呼吸に関係のある臓器の病気や膠原病などの診断・治療を専門的に行っています。外来診療を中心に入院治療にも対応しております。当院で治療困難な場合は、専門病院へ紹介するなど地域連携を図っており、安心できる継続治療に努めております。

循環器内科

循環器内科では、主に虚血性心疾患、心不全、不整脈、弁膜症、心筋症、大動脈疾患に対する薬物療法や、高血圧、脂質異常症、高尿酸血症等を管理しています。また、当院整形外科にて手術予定の患者さんの術前診察や、他院より循環器内科疾患の相談を受けることもあります。精査が必要と判断された患者さんは専門医療機関へ紹介し、急性心筋梗塞等の緊急性のある疾患は三次救急医療機関へ搬送するなど、他院との連携も行なっています。

一般内科・在宅医療

一般内科・在宅医療では、内科医師3名体制で、一般内科の診療を行っております(一般的な内科疾患の治療、二次健診、健康相談など)。外来・入院治療だけでなく、在宅医療にも力を入れており、訪問診療や在宅看取りにも対応しています。地域包括ケアのもと周辺の地域性を考慮し、高齢者や複数の病気を持つ慢性疾患の方々が、住み慣れた地域で暮らしていけるよう、健康管理・生活支援を行っていきます。

皮膚科

皮膚科では、皮膚科全般にわたって正確な診断・適切な治療をモットーに診察を行っています。アトピー性皮膚炎・蕁麻疹・かぶれ・湿疹・薬疹等のアレルギー性皮膚の診療・乾癬など慢性の皮膚疾患に対する光線療法・皮膚の良性腫瘍・悪性腫瘍の診断治療、褥瘡の治療や予防指導、糖尿病性潰瘍などの難治性皮膚潰瘍の治療にも取り組んでいます。難治性・遺伝的皮膚疾患に対しては、各々の疾患を専門とする先生や病院をご紹介します。

麻酔科

麻酔科は、平成10年1月に辻重喜先生により開設され、現在麻酔専門医2名で年間270例前後の手術麻酔とペイン外来を行っております。当院の手術第一例は平成3年3月に膝関節鏡手術が行われています。その後泌尿器科手術も行われましたが、現在は、膝、股関節の人工関節置換術を中心に、膝・肩関節鏡、手の手術を行っています。高齢化に伴い心血管系の合併症を持った患者も増加しており、日々安全な周術期管理を目指しています。

泌尿器科

泌尿器科では、泌尿器科診療は週1回(金曜日)の外来のみです。精密検査や入院治療が必要な場合は、連携している熊本市内の病院への紹介を行わせて頂いております。皆様にはご不便をおかけしますがよろしくお願い致します。当科を受診される方の症状としては、尿が出にくい、近い、漏れる、子供のおねしょ、また尿に血が混じる、健康診断で異常を指摘された等です。男女を問わず、子供から高齢者まで幅広い年齢層を対象に診療を行っています。

地域連携課



地域連携課は、看護師と社会福祉士にて院内外の窓口として業務に携っています。主な業務内容は、前方連携として医療機関や地域からの入院相談の窓口としての役割、後方連携として、当院に入院してこられる患者さんが安心して住み慣れた場所での生活を送れるよう、退院支援を行っています。

また、地域連携機関との勉強会「にしくまカフェ」を定期的に開催し、看取りや感染対策等のテーマを通して参加者同士で意見交換を行うなど、地域全体を繋いでいく企画を実施しています。

今後も院内外の連携の窓口として、各機関とのネットワークを構築し、地域住民が安心して生活のできる地域づくりを目指していきたいと思っています。

診療サポート課



診療サポート課は、医師事務作業補助者6名、病棟クラーク3名で構成されています。医師事務作業補助者は医局に席をおき、外来陪席での代行入力や各種書類、診断書作成業務を行っています。病棟クラークは一般病棟、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟において、施設基準や実績データに関連する業務、診療録のチェックを行っています。医師事務作業補助には特に力を入れており、医師と関連職種をつなぐパイプ機能、チーム医療の質向上のためのサポート機能、患者さんへのインフォームドコンセント充実のための通訳機能など、より患者さんに近い側からのアプローチを心掛け業務を行っています。

診療システム課



診療システム課は平成30年8月に新設された部署で、現在2名のスタッフで院内のITに関わる業務を担当しています。

主な業務内容として、電子カルテを始めとした各システムの保守や導入、院内で稼働しているPC等のIT機器のトラブル対応を行っています。

医療現場において診察や検査、画像診断、会計作業等の様々な業務がIT化されており、病院経営を行っていく上でITは重要な役割を担っています。

診療システム課ではITを通し病院業務全般に携わることで、日々の診療が安全かつ円滑に実施できるよう病院経営をサポートしていきたいと考えます。

看護部

看護部



《理念》

豊かな人間性と確かな知識・技術をもって

患者さんに心からの関心を寄せた看護・介護を実践します。

平成30年は新たな組織体制の構築に向け、これまで地域に根ざしてきた医療の質を確かめよう、そしてこの厳しい医療環境に乗り遅れない組織であるために改善活動を行っていこうという思いから新リーダー体制のもと、病院機能評価受審をいたしました。

この改善活動のプロセスを通して、

- ① 中間管理職の育成
- ② 新人教育体制の再構築
- ③ 個々のキャリア開発のための教育体制の構築
- ④ 臨床現場における看護マインドの浸透

が大きな課題となりました。これから皆で力を結集し、患者さんや家族の方々のみならず働く職員の満足が得られる看護部となれるよう努力してまいります。

外来看護



外来診療は、内科(一般内科・消化器・循環器・呼吸器・代謝・神経)・整形外科・泌尿器科・麻酔科があります。患者さんに診療や検査等をスムーズに受けて頂けるように医師だけでなく、秘書や事務、コメディカルと情報共有し連携を図っています。

限られた時間の中で検査・処置・診療を行うため、看護師が診察前の問診や診察介助、入院や検査・手術の説明などを行っています。また医師の説明でわからないことなど補足説明を行い、精神的なサポート役割を担って頂けるように努力しています。

平成30年11月から骨粗鬆症外来が開始されました。骨粗鬆症の治療をされている方が多く、継続して治療を受けて頂けるよう医師や管理栄養士・薬剤師・セラピストと共にサポートしていきたいと思っております。

3階病棟看介護



3階病棟は、回復期リハビリテーション病棟(36床)です。回復期リハビリテーション病棟では、脳血管疾患・大腿骨近位部骨折・肺炎後の廃用症候群などの患者さんに対して、医師・看護師・介護福祉士・セラピスト・社会福祉士・薬剤師・管理栄養士など多職種でチームを組み、寝たきり防止と家庭復帰を目的としたリハビリを集中的に行うための病棟です。

平成30年4月の診療報酬改定により、回復期リハ病棟の入院料が再編され、質の高いリハビリテーションが求められるようになりました。

私たちは、各職種の特性を活かしたチーム力で、患者さんの自分らしい生活の再構築に向けて、情熱をもって支援します。また、職員一人一人が、専門的知識・技術の向上、そして人としての成長に努め、患者さんの思いに寄り添い、ここに来てよかったと思える病棟づくりに努めます。

4階病棟看介護



4階病棟は、地域包括ケア病棟(38床)となり5年目を迎えました。

地域包括ケア病棟協会の理念である「ときどき入院、ほぼ在宅」に向けて、私たちは患者・家族の気持ちを受け止め、在宅生活を見据えた関わりを目標に多職種でゴール目標の検討や設定、問題点を明確にすることで同じ目標に向かって取り組んできました。

入院・入棟1週間以内のカンファレンス開催や、入院・入棟1ヶ月頃に行うケースカンファレンス・担当者会議の開催が定着し、早期から医師・看護師・セラピスト・社会福祉士の多職種と連携・協力しながら情報共有を行い退院に向けた関わりを行っています。高齢化が進み独居や老々介護をされている患者・家族が増え、住み慣れた在宅で生活していくための環境調整に苦戦する事も多々ありますが、今後ますます患者さんのニーズが多様化する中、患者・家族の思いに寄り添う関わりを行っていきたいと思います。

5階病棟看介護



5階病棟は、整形外科・内科の一般病棟(38床)であり、26名のスタッフが所属しております。当病棟では、主に膝関節鏡や人工膝関節置換術などの整形外科手術があり、その他に急性期病院での治療後の在宅復帰へ向けた治療・リハビリを目的とした患者さんの中間的な医療を提供しています。入院早期から患者さん・ご家族を含め、医師・看護師・管理栄養士・セラピスト・社会福祉士など他職種で治療方針を共有し、チーム連携で質の高い医療を提供できるよう努力しています。

毎月の入退院数も120名前後と多く、多忙な中でも「スタッフの笑顔が多い病棟、そして患者さんに寄り添い安全で信頼される病棟を目指す」を目標に、患者さん・ご家族の想いを大切にし、患者さんが求める看護・介護が提供出来るようチームスタッフ一丸となり明るく笑顔でケアを行っています。

6階病棟看介護



6階病棟は、介護療養型医療施設、医療療養病棟を経て、平成29年9月に地域包括ケア病棟として新たなスタートを切りました。病床機能の変更に際しては、環境整備のための病棟内工事の実施、勤務体制や業務内容の変更など様々な変化があり、スタッフ皆で懸命に対応していきました。変化の落ち着いた現在は、地域包括ケア病棟としての役割を学びながら日々研鑽を続けているところです。平成30年8月からは在宅復帰支援にも取り組み、医師・看護師・介護職・セラピスト・社会福祉士他、多職種で連携・協力し、患者さんが安心して入院し退院後の生活で困ることがないように、個々の患者さんに応じた退院に向けての問題解決を行っています。まだまだ未熟な面が多くありますが、スタッフ同士足りないところを補い合い、患者さんとその家族の生活をふまえた入退院支援を充実させていきたいと考えています。

手術・中央材料室



手術は、泌尿器科、皮膚科、整形外科手術が行われていましたが、近年は、皮膚科と整形外科手術が最も多く行われています。整形外科手術では、人工関節置換術や関節鏡手術が主でしたが、平成30年4月にあらたに整形外科医師が1名入職したことにより、手根管開放術や腱鞘切開術など、手の手術が増えています。その他は皮膚科の手術で腫瘍摘出術を行っています。

近年は高齢化やリスクの高い方の手術も増えており、医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・セラピストと共に術前カンファレンスを行い、看護師は患者さんのもとへ術前訪問に伺い不安や分からないことがないか、体調はどうか等を確認します。また術後も訪問し、術後の状態把握まで行います。手術室スタッフだけでなく手術に係る職種の連携を強化し、安全で安心して手術が受けられるように努力しています。

中央材料室の業務は主に外来や病棟、手術室で使用する医療器材の洗浄、消毒・滅菌や衛生材料の滅菌を行います。患者さんの身体に使用される物がほとんどであるため、安全な機材を提供できるように配慮しています。

健診センター



健診 センター



健診センターは、「まごころこもった信頼される健診」を目指し生活習慣病の予防、病気の早期発見、早期治療に役立てて頂くための各種健康診断や人間ドック、特定健診など実施しております。完全予約制をとることで質の高い健康診断を実施し、また、丁寧でアットホームな雰囲気作りにも努めております。平成29年4月より特定保健指導も再開し、お一人お一人に合わせた生活改善提案・情報提供をさせて頂き、よりよい生活習慣を取り入れてもらえるよう当健診センターが全力でサポート致します。

健康診断は身体の異常を見つけるだけでなく、将来的な発病リスクを見つけることも大きな目的としています。心臓病、脳卒中、糖尿病など日本人の主要な死因となる病気を予防することで、地域の健康増進を推進し、本院が目指す熊本ホスピタウン構想の一助となるよう今後もスタッフ一同努力してまいります。



薬剤課



薬剤課は、病院理念のもと患者さんのため、地域のために職能を通して何ができるかを常に考え実践できる自律した薬剤師となることを目指しています。薬物療法の高度化に伴い、薬の専門家である薬剤師が医師や看護師、その他の医療スタッフと連携し医療チームの一員として業務を行うことが医療の質の向上とともに安全の確保、有効性の担保につながります。各病棟へ積極的に出向き医薬品の供給、調剤、薬学的管理指導、処方設計、処方提案等を実践できる力を養い社会貢献していきます。

平成30年度の取り組みは、地域包括ケアシステムへの貢献を視野に在宅医療へ力を入れることでした。終末期の緩和ケアにおけるきめ細かい薬物治療は、医師・看護師・ケアマネージャー等との情報共有と連携が重要です。今年度、数件ですが訪問薬剤管理指導を実施し、体制を構築できました。今後も薬物の適正使用のために切れ目ない介入を実施していきたいと思えます。

臨床検査課



臨床検査課は、12月現在、臨床検査技師8名で検体検査・生理検査業務全般に携っています。部署方針を『検査結果を、正確かつ迅速に付加価値をつけて報告することを目指します』『他職種の依頼に常に対応できる即戦力・機動力のある検査室を目指します』とし、継続的な質の向上を、個々及び課全体の命題として日々研鑽を積む日々です。

ここ数年、技師の業務拡大が具体的に法改正として示されています。新たな検体採取業務追加、精度管理責任者の配置・標準作業書の整備など、当院としても順次対応しているところです。

今年度の取り組みとしては、検体検査パニック値の報告手順の整備があります。パニック値とは生命の危険な状態を示唆する異常値のことで、より早く主治医へ報告し患者様の適切な医療行為へ反映されることを目的とし一定の基準を設けています。今まで行っていた報告の基準や手順を、標準化し整理できたことは有効でした。

診療放射線課



診療放射線課は、病気の早期発見、正確な画像診断を行うところです。内科、外科をはじめ全ての課からの依頼に応じて、一般撮影、CT、MRI、骨密度測定、消化管造影など最新鋭の医療機器を駆使した精密な画像診断を、診療放射線技師3名で行っています。

診療放射線課の取り組みとしては、技師通常業務に加え、骨粗鬆症治療(骨密度検査結果説明等)に積極的に関わり、チーム医療に貢献しております。

その他、毎週金曜の朝に医師・放射線技師・看護師・義肢装具士・秘書など多職種が集まり、画像カンファレンスを行っております。カンファレンスでは、症例や治療の検討や撮影の方法など逡巡することなく意見が交わされ、業務改善に取り組んでおります。

今後とも安全で安心な検査の提供、質の高い検査の提供を心掛けたいと考えています。

栄養管理課



栄養管理課では、当院基本方針を基に患者さんに寄り添い、心のかよった栄養管理と食事提供ができるよう心掛けています。病棟訪問を行い、患者さんの喫食状況やご意見を伺い献立に反映させています。むせやすく飲み込みにくい等の嚥下食やアレルギー等、きめ細やかな対応も行っています。

疾病予防や糖尿病、高血圧症、脂質異常症、腎臓病、低栄養状態、嚥下食について栄養指導を行っています。患者さんの生活環境を大切に「食事療法や栄養状態に対して不安のある方」「最近、むせやすく飲み込み等に不安がある方」などわかりやすい食事療法について一緒に考えていくことを心掛けています。

NSTチームは、医師・看護師・管理栄養士・薬剤師・セラピストなどの多職種がそれぞれの専門性を生かして低栄養状態の患者さんに、適切な栄養管理が行われるよう支援することを目的としています。栄養状態を良くすることで、治療効果を高め早期に社会復帰できるよう目指しています。



セラピスト課

セラピスト課は、理学療法士36名、作業療法士25名、言語聴覚士7名、助手3名で、その内医療部門は、59名で構成されています(平成31年3月現在)。

理学療法

主に身体運動機能に関して、運動療法や物理療法(温熱・電気治療等)を使用して治療を行います。基本動作(起きる、座る、立つ、歩く、走る)などの訓練を主に行い、日常生活に重要な体の動きを向上させます。

作業療法

「人は作業をすることで元気になる」をモットーに、その方の“したい事・する必要がある事”に焦点を当て、排泄・更衣・入浴・整容・食事といった日常生活動作から趣味・役割・仕事などの再獲得を図り、家庭や地域の中で生き生きとした生活が送れるよう支援します。

言語聴覚療法

ことばや聞こえ、認知、嚥下に問題がある方に対して、評価・訓練・指導を行い、思いを伝え合う喜びを持てるように支援します。また、ことばの発達が遅れている子どもへの言語指導等を行い、コミュニケーション能力の改善を図ります。

理学・作業・言語聴覚療法においては、様々な疾患の患者に対し、在宅部門と連携をしながら、在宅生活を見据えたアプローチを行っています。国が提唱する地域包括ケアシステムの考え方にに基づき、患者や家族から“これまでの役割”や“退院後に行いたいこと”を聴取し、患者自身が役割等をもって自律した生活となるよう、“退院後のその人らしい生活”に繋がるアプローチを実践しています。そして、その方の退院後の行動様式や役割を支援するケアマネジャーや通所リハ等へ、生活行為申し送り表を退院前に渡す事で、入院からの継続した支援・アプローチとなるように取り組んでいます。

外来では、自宅生活上での動作における助言や痛みの確認、スポーツや仕事復帰に向けた指導などを行っています。また、言語発達障害や吃音、機能性構音障害により学校や園での生活に支障を来している小児患者の言語訓練も増えてきています。

教育の面では、年間を通して養成校より多くの臨床実習生を受け入れ、共に学び合う環境作りを目指しております。新人教育に関しても、プリセプター制度を導入し、良質なリハビリテーションの提供に努めております。



テクノエイドセンター



テクノエイドセンターでは、義肢装具作製設備を設けて院内での補装具の作製、修理、他施設で作製された装具の調整が可能となっています。義肢装具士が常勤していることで、装具完成までの作製時間の短縮、調整や修理に迅速に対応することが出来ています。作製、適合、調整までを一貫して行い、他の専門スタッフと連携を図り社会復帰を支援しています。

事務部

事務部



私たち事務部は、総務課、経営管理課、医事課、診療情報管理室、施設購買課（医療機器管理室・法務対策室）で構成されており、患者・家族へ寄り添い、心の通った医療を提供するチームの一員とし、健全な経営・病院運営に寄与することを目的とし、各部署で以下のような取り組みを行っております。

2025年・2040年問題に向け、地域にお住いの皆さんが、住み慣れた地域で安心して暮らし続けていくためには医療・介護の充実が重要であり、地域と協働した地域包括ケアシステムの実現が必須であると考えます。当院が地域に必要とされる医療・介護が永続的に提供できる病院経営を事務部一丸となって取り組んでいきたいと思っております。

総務課



総務課の業務は、職員の社会・雇用保険、施設について行政への申請関係、保育園運営や慶弔手続き、職員健診などの福利厚生関係、ホームページ管理や広報誌「にしくまだより」の作成、地域イベントへの参加、そしてリクルートなどの広報関係、他にも相生会本部との就業規則統一や外部からの監査対応のサポートなど幅広く活動しております。

マイナンバー制度やストレスチェックなど国が新しく始める制度もあり、都度ミスが無いようスペシャリストとして業務のアップデートを行いながら、病院全体をみることできるジェネラリストとしても柔軟に活動していきたいと考えます。

経理課

経理課の業務は、経理、給与、社会保険などを行っております。平成30年7月から外部による会計監査が行われることに伴い就業規則や経理に係る規程が整備され、厳格な処理が求められるようになりました。規程が整備されたことで経理処理の根拠が明らかになり、また平成25年の福岡相生会との合併後においても当院独自の規程のままであったが統一されたことにより本部と連携して処理できるようになるなどメリットが得られました。経理は正しい処理が求められる部署であります。しかし、時として誤りが発生します。その際は、しっかりと反省し、原因を明らかにして同じ過ちを起さない対策を講じ、業務に取り組むよう心掛けています。



経営管理課



経営管理課は、平成25年4月の組織改編により誕生し、現在は3名のスタッフが所属しています。

業務内容としては主に各部署の業務支援、データ管理等です。具体的には、主要な会議の運営、各部署の業務改善効率化のサポート、診察や検査、事務作業等、現場から得られる膨大なデータを収集・管理するなど病院全般に係る幅広い業務に関わり、緑の下の力持ちとしてその存在感を発揮すべく業務に取り組んでいます。

医事課



医事課では、外来・入院・ハブセンターの医療業務を担当しております。外来受付担当6名で一日平均200名の患者さんや来客をスタッフ間で声掛けあい、受付・算定業務に取り組んでいます。入院は3名体制で4つの病棟の、算定業務はもちろん、入院案内や未収金防止などに取り組み、業務強化に努めています。ハブセンター（介護・在宅医療）にも事務として2名在籍し、すべての請求を行っております。

診療報酬・介護報酬の改定においては、改定内容の情報発信や院内勉強会などを企画し、情報の共有に努めております。

診療情報管理室



診療情報管理室では、診療情報管理士を3名配置し、電子カルテシステムにて診療情報の一元的な管理を行っています。主な業務としてはカルテの点検業務、貸出業務、統計業務などがあります。平成30年の病院機能評価受審に伴い、これまで実施していた入院カルテの記載漏れや必要な帳票類が揃っているかなどを点検する量的点検に加えて、入院カルテが適切に記載されているか点検する質的点検を医師と診療情報管理士で行いカルテの精度向上を目指しています。また、当院は現在DPC準備病院であるため医師、看護師などと連携を図りながら適切なデータを提出できるよう努めており、これらのデータを活用して今後も診療情報の構築を行っていきます。



購買係は、購入業務において、各現場に「必要なモノが必要な時に必要な数だけ提供できるよう」、適正な在庫管理・継続的なコストダウンを行い法人内の必要収益確保を支援しています。

施設車両係は、建物・設備・機器や車両等の運用・保守及び敷地内の環境整備を適正且つ計画的に実施し、法人運営の維持・管理の支援をしています。

それぞれが異なった役割ですが、各々の立場で自らの持てる能力を精一杯発揮し、サポート部門としてそれぞれが組織の「一隅を照らす」仕事をしていくことで部署全体として大きな灯りとなり、法人運営に寄与できるよう努力しております。

法務対策室は、法人内の紛争を未然に予防し、またクレーム対応を行い法人内のリスクマネジメントを行っています。

医療機器管理室は、診療に要する医療機器の適正且つ計画的な更新とメンテナンスを実施し、また教育やマニュアルの周知を行うことで機器の適正運用を維持し各診療現場の活動を支援しています。



居宅介護支援事業所

ハブ センター



居宅介護支援事業所は、現在、7名の介護支援専門員が所属し、うち5名が主任介護支援専門員です。

利用者は、特に回復期リハビリ病棟や地域包括ケア病棟を退院した脳血管疾患後や、整形疾患(骨折後)の利用者で継続してリハビリをしたいという希望の利用者が多く、併設の通所リハビリや訪問リハビリの利用に結びつく利用者の方が半数を占めています。利用者の多くが、当院の外来患者受診範囲と重なっており、熊本市南区(特に富合、城南、川尻)、宇土市、宇城市と広範囲にかけて実施しております。

また、5名の主任介護支援専門員がいることで、当事業所のみならず近隣の事業所を交えて勉強会や事例検討を行い、富合地区の質の向上に向けて取り組んでいます。

訪問看護ステーション きんもくせい

きんもくせいは、平成30年秋に看護師2名が入職し看護師7名体制で稼働しています。

住み慣れた自宅や施設で、その人らしく安定した生活を送る事ができるよう支援させていただいています。訪問地域は、熊本市(主に南区)・宇土市・宇城市で片道約30分程を目安にしています。疾患は様々で、医療的ケアのある方が全体の30%です。また必要な方には24時間相談ができる体制でサポートしており、安心に繋がっているようです。

リハビリ依頼の際は病院から専門性の高いセラピストが訪問できる体制をとっており、多職種で関わり連携しています。病状が悪くなる前の予防的関わりも重要で、訪問頻度は様々です。平成30年12月より精神科訪問看護も可能となりました。今後も多様なニーズに対応でき、質の高いサービス提供ができるよう取り組んでいきたいと思っております。



訪問リハビリテーション

訪問リハビリテーションは、理学療法士3名、作業療法士3名、言語聴覚士1名(院内兼務)にて当院を起点に半径5kmを中心に展開しております。また、多くの紹介を頂き、遠方に関しましても相談させていただきながら、ご依頼を断ることなく提供させて頂いております。事業所のモットーを「毎日の生活をより安全に、より安心に、より楽に行えるよう支援します」と掲げております。

必要に応じた期間での達成目標を利用者と共有し、社会参加に促す事も積極的に取り組んでおります。自宅での生活が困難となったり、退院後の生活をその人らしく送る事が出来るように各事業所等と連携を取りながら提供しております。



通所リハビリテーション れんげ草



れんげ草は、平成29年11月より予防給付利用者を1日のご利用から運動特化型の短時間利用に変更し、在宅での個々の役割を重視する事で住み慣れた地域でいきいきと暮らしていけるような関わりを心掛けてきました。また、平成30年4月の介護報酬改定と同時に、入浴サービスを通所リハ本来の目的に遵守する形で見直し、調整を行いました。平成30年9月からは定員数を整備し、大規模事業所Ⅱ→Ⅰへ変更してサービス提供を行っています。

今後、院内の在院日数が短縮され、在宅部門の早期介入が求められてくるため、院内スタッフとのより密な連携の強化が必要となります。また、介護給付利用者、予防給付利用者共に、生活行為の向上が図れ、個々の役割が果たせるように支援していく事が必要になります。地域住民と共に地域づくりにも積極的に関与し、行政・多職種とも連携を深めていきたいと思っております。

(特定施設)サービス付き高齢者向け住宅「ホスピタウンハウス」



ホスピタウンハウスは、平成26年1月に開設し6年目になります。居室は33室にて全室広々とした個室であり、入居者の方がご自分らしく最後まで過ごせる家を目指しています。長く入居していただいている方が多く、現在の平均年齢は90.2歳、平均介護度は2.23(要支援の方も含む)と高くなっています。現在のADLを出来るだけ維持する為、出来ることはご自分で行って頂くように心がけ、できない部分をスタッフ全員で支援しております。季節の変化を感じて頂けるよう行事やレクリエーションにも力を入れて取り組んでいるところです。また、母体であるにしくまもと病院と隣接している事も大きな特徴で、連動したケアやサポートが可能な為、外来通院時等も便利です。職員も一つ一つ看取り等経験しながら多くの事を学ばせて頂いております。

今後ご家族、地域の方との連携を強めながら、入居者の方の安心、安全な生活を支えていきたいと考えております。

地域総合サポートセンター

地域総合サポートセンター



地域総合サポートセンターは、「熊本ホスピタウン構想」の実現に向け中心となって活動する部門として、平成30年6月1日に開設されました。「富合町を子供からお年寄りまで、最期まで笑顔で生活できる町・ホスピタウンにしよう」の構想のもと、地域の方・行政・医療・介護・福祉・保健と一層連携を深めていく

必要があります。現在は、地域のサロン開催や老人会、そしてサロンサポーター養成講座などに参加させていただいております。また、他職種連携会議などに参加し他職種の活動など情報共有を図っております。

地域で生活される方々の声をしっかりと受け止め、地域に活かせるにしくまもと病院となるために、地域の方々や関係機関の方々と顔の見える関係づくりに努めて参ります。

地域包括ケア推進室



地域包括ケア推進室は、県の委託事業である地域リハビリテーション広域支援センターの業務等を通じて、地域との連携を図りながら地域づくりに寄与しております。主な業務として、熊本市の総合事業「くまもと元気くらぶ」も含めた地域の通いの場の立ち上げ・運営の支援や福祉用具導入・住宅改修に関する現地指導、地域の事業所等を対象とした研修会や連絡会議の開催、必要時の地域密着リハビリテーションセンター等のリハビリテーション専門職の派遣調整、地域ケア会議への助言者派遣、地域リハビリテーションに関連する各種会議や研修会の参加等があります。今後も様々な活動を通して、地域包括ケア構築の推進の一助となれたらと考えております。

院内保育所

ホスピタウンKIDS



院内ホスピタウンKIDSは、平成25年4月、にしくまもと病院職員様のお子様をお預かりする施設として、院内保育所ホスピタウンKIDSが開園致しました。開園当初は、ご利用者様3名からのスタートでしたが毎年少しずつ利用して頂く人数も増え、今では0歳児～2歳児まで20名の子ども達と毎日楽しく過ごしています。結婚出産を経て、育児休暇取得後に近隣保育所に入れずやむなく仕事を辞めなくてはならないといった状態を緩和できる場所であると共に、病院内の中庭で遊んでいる姿や様々な行事で子ども達の日頃の様子を働きながらでも見ることが出来、身近に感じて頂けるのではと思います。働くお父様お母様が安心して働いて頂けるようこれからも子ども達を暖かく見守っていきたく思います。

臨床薬理センター

臨床薬理センター

臨床薬理センターは、平成20年4月に医薬品開発のための治験業務を専門に行う部署として開設されました。開設して10年、主に後発(ジェネリック)医薬品の開発のため、健常人を対象とした生物学的同等性試験(先発品と同じ効果が期待できるかを確認するための試験)を行っています。加えて、新薬の開発では、健常人や患者を対象に第Ⅰ相試験、第Ⅱ相試験及び第Ⅲ相試験など様々な治験を行っています。また、入院が可能な治験施設としては、熊本県内では唯一の施設であり、治験専従の医師、薬剤師、看護師及び検査技師等のスタッフを40名程配置することで、より高い専門的な知識に基づき、製薬会社の求める品質にお応えできるよう日々業務を行っています。

さらに、病院スタッフによる臨床研究支援にも積極的に取り組み、研究の立案から治験審査委員会の審議依頼、研究発表のサポートなどを行うことで研究者が抱える負担の軽減を図る取り組みを行っています。



臨床薬理センター長
入江理事長



臨床薬理副センター長
辻重喜





A circular white graphic containing watercolor-style flowers in shades of green and yellow at the top left, and a green four-leaf clover at the bottom right. The text "将来に向けて" is centered within the circle.

将来に向けて



これからの私たち、にしくまもと病院

医療法人 相生会
にしくまもと病院 院長代行

山口 浩司

平成30年、にしくまもと病院は30周年を迎えました。昭和から平成にかけて、経験重視の医療から技術革新の扉を開け、早期診断、早期治療は具現化されました。その過程で情報化社会と相まって、医療行為、治療成績は一般にも周知されていきます。パターンリズムは医療を標準化しましたが、有益性と固有性の狭間で医療本位の考えに疑問符が付きつけられ、医療過誤がクローズアップされるに至ります。平成の前半は「患者中心」の医療の始まりにほかならなかったようです。その後、インフォームドコンセントの時代へ突き進みましたが、その一方では医療者側の疲弊についても問題視され始めています。平成の終盤にはさらに患者中心から「患者参加」の型の時代へと進んで行くようです。

30年まさに平成という時代とともに歩んだ病院ということが出来ます。この時代でにしくまもと病院は激動の歴史を歩んできました。地域に根差したハブ機能を有する病院、手術のできるリハビリテーション病院、慢性期の高度医療を提供する病院という立場を確立させるため日々の診療に励んでまいりました。さらに求められる病院とは、問い続けなければならないと思っています。

私は平成4年に医師となりました。バブル崩

壊後の時期、とにかく早く技量を身に着けたい、何でも診ることが出来るようになりたい、と意気込んでいました。現代では無茶と思われることにも挑戦していたようです。専門医になり外傷外科、関節外科への思いが膨らみ少しずつ専門を突き詰める傾向が出る中、人の生き方に関わる難しさを実感するに至りました。病を診るまえに人を見ることの大切さを忘れずにいたいと思っています。このことは、林茂病院長、にしくまもと病院との出会いが私に与えてくれた大きな影響によるものです。医療を取り巻く環境において、この30年間よりもさらに早い変化への対応が迫られます。コンピューター支援手術は医療を低侵襲で確実なものとし、AIの活用は医療界でも進むものと予想されます。当院でも術前シミュレーションをはじめ新しい技術の採用を行っております。しかし、今後さらなる進歩の波に乗ることが求められます。時代を生き抜くためには避けられない現実と向かい合わねばなりません。身近には3年前の大地震。甚大な被害の中、私たちはあたりまえのものを失くす悲しみ、苦しみを心に刻みました。おさまるのを待つしかない人間の無力さを知り、頼ることの大切さ、頼られることの有難さを知りました。自然災害、高齢化社会、労働者不足に伴う外国人雇用など、一つとして医療、



そしてにしくまもと病院と無関係なものはないのです。先の見えない不安が重く押し掛かりますが、私たちは一角を照らすことから社会貢献の一步を踏み出そうと思っています。より良く生きたいという人間のあたりまえの気持ちに寄り添うことで、覚悟を強くし、勇気を頂けるものと信じています。

新年号に変わる年、日本にとって、そして私たちにとってもまさに始まりの年です。私たちが新しいリーダーの育成に取り組み始めた平成の終盤を経て病院機能評価を受審に至りました。より良い方向に進み始める元年の年であると確信しております。

時代に向けて、にしくまもと病院は新しい理念をかかげました。私たちに求められる強さとは、謙虚になる強さ。個人の能力を生かす職場としての強さ。正しいことを継続する強さ。自らの間違いを受け入れる強さ。信じる強さ。本当の強さを追求していきます。

強さの裏打ちにあるものは優れていること。豊かな人間性、確かな技術、深い知識、時代はあらゆる面で優れていることが求めています。

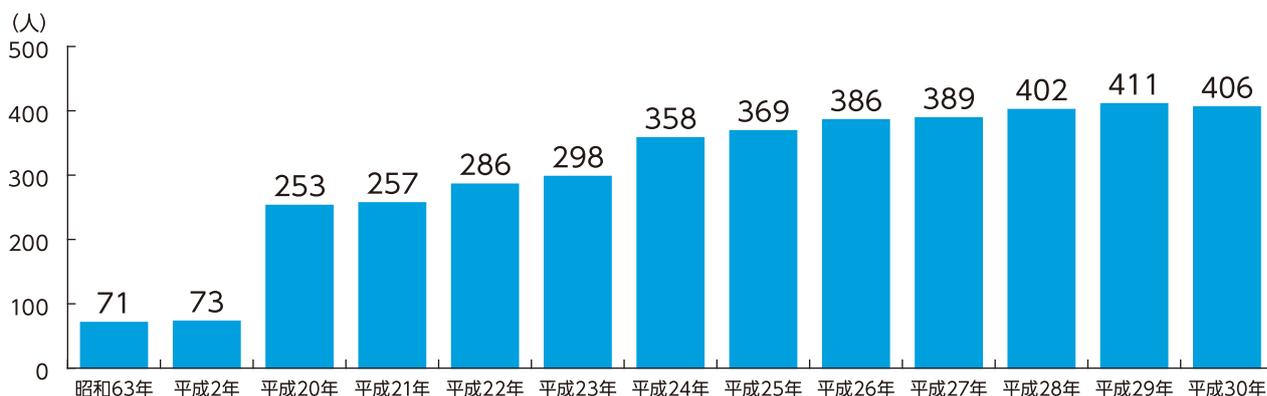
医療人として何よりも欠かせないもの、優しさ。敬う優しさ、支援する優しさ、育てる優しさ。さしのべる優しさ。私たち、にしくまもと病院は地域

に根差し、調和することが求められています。私たちを必要として頂いている患者、家族に寄り添い、心を通わせることを日常とする、優れた医療人であるべきと考えています。優れた病院であるために常に個人、組織が向上心を持ち、医療の質を保つことが求められます。現場に喜びがあることを変わらない目標としながらチーム医療の実践を通して、職員一人ひとりが優れた医療人となることを支援していきます。やりたい、できる、成し遂げたいと思ったことが必ずできるとは限らない。できない、成し遂げられないと思ったことは絶対に出来ない。変わらない志は強く、優しく、優れた病院を目指すこと。そして忘れてはならない。個人で達成できることは少なく、同じ志の集まりで成る組織が個の力を生かすことで成果を生むことを。私たちはOne Teamとなって日本一を目指して邁進していきたいと思っています。40周年記念誌に新たな目標が掲げられますように。

これからも私たち、にしくまもと病院を叱咤激励、ご指導していただきますようお願いいたします。



1. 職員数



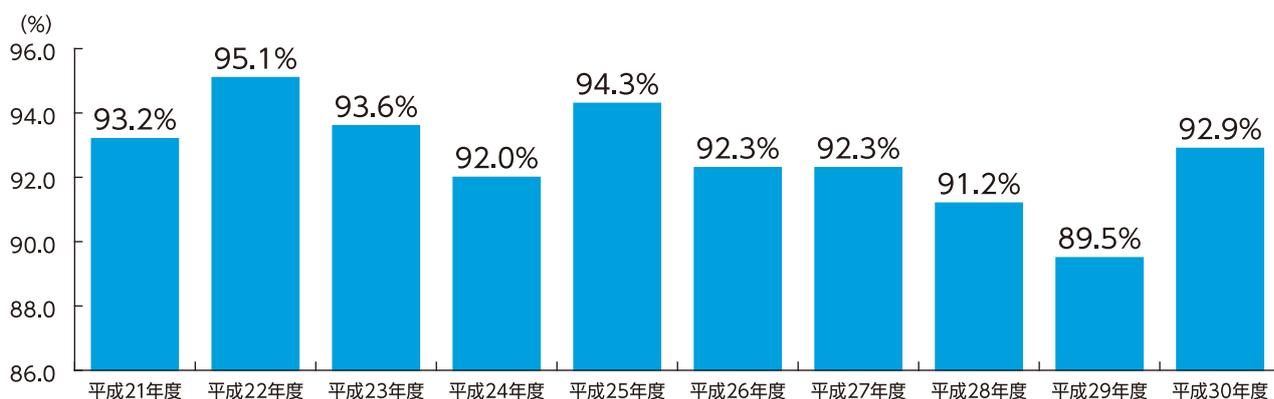
2. 外来患者延べ数



3. 入院患者延べ数



4. 病床利用率



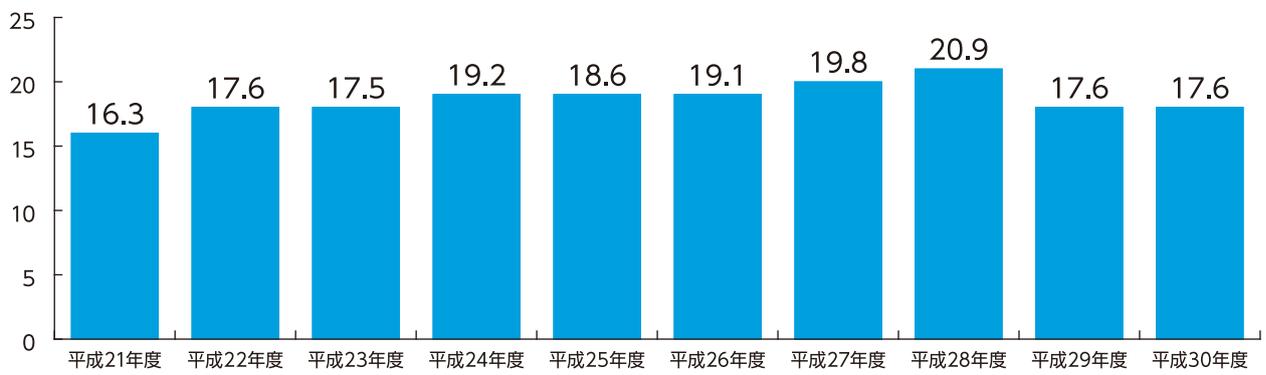
病床数

S63年：87床→H6年：107床→H8年：114床→H12年：127床→H20年：146床

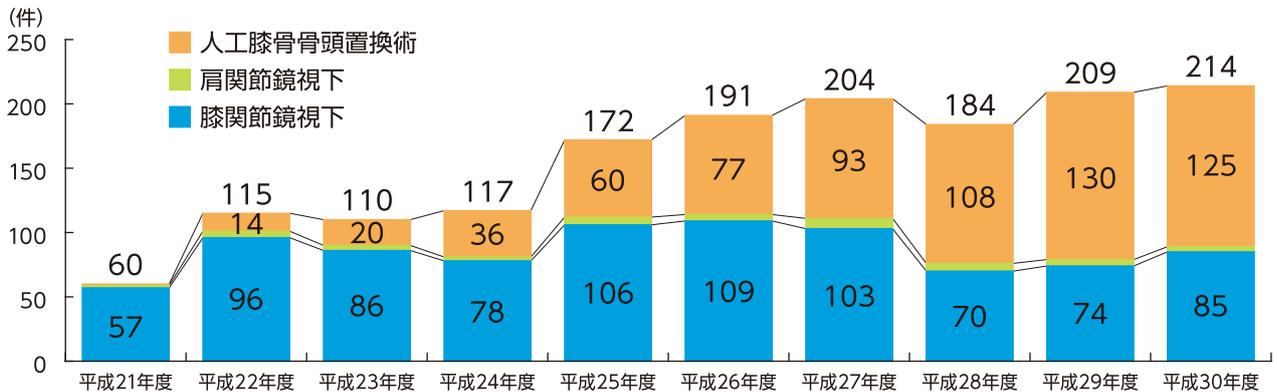
病棟の変遷

	H24	H26	H27	H29
3階病棟	36	36	36	36
4階病棟	40	40 (地域包括1)	38	38
5階病棟	40	40	38	38
6階病棟	30 (療養)	30	34	34 (地域包括2)

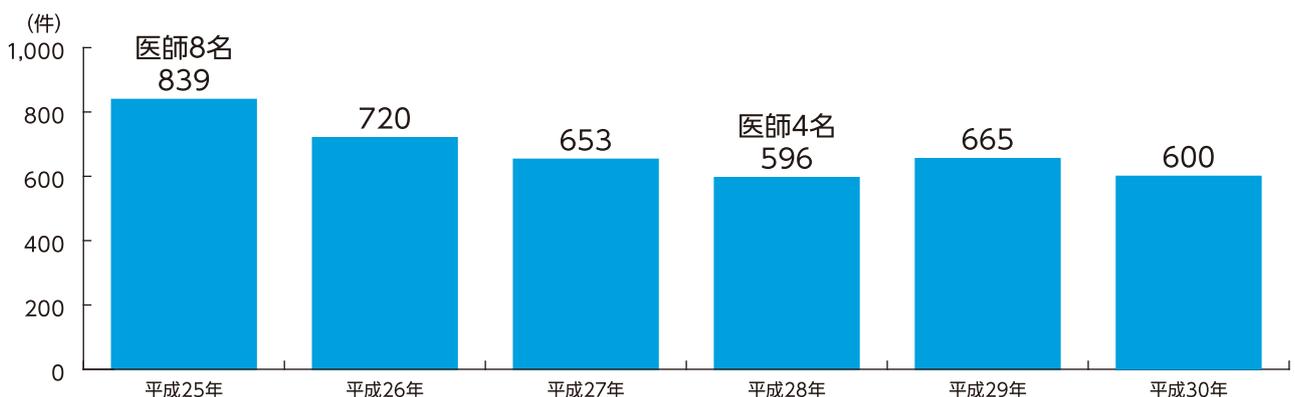
5. 一般病棟平均在院日数



6. 整形外科手術件数

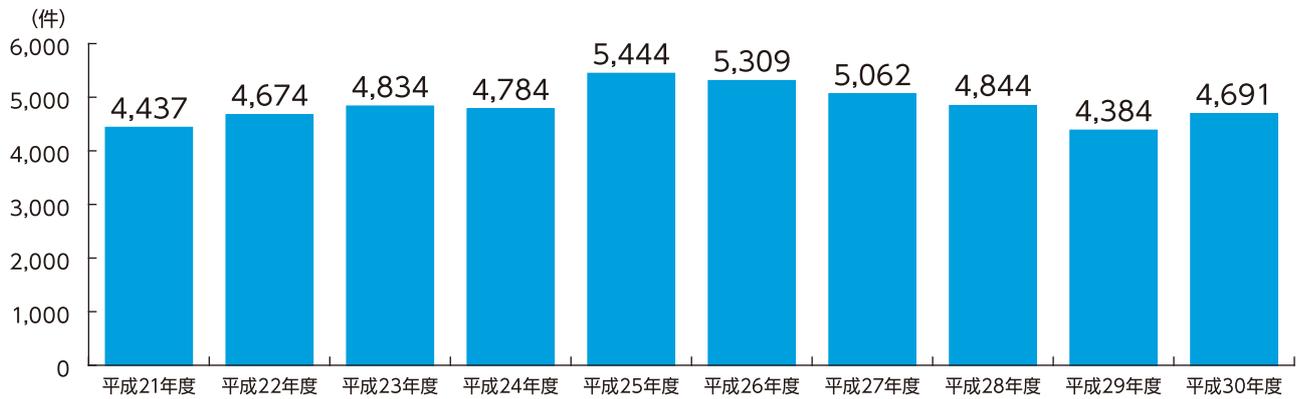


7. 訪問診療延べ件数



8. ハブセンター利用者延べ件数

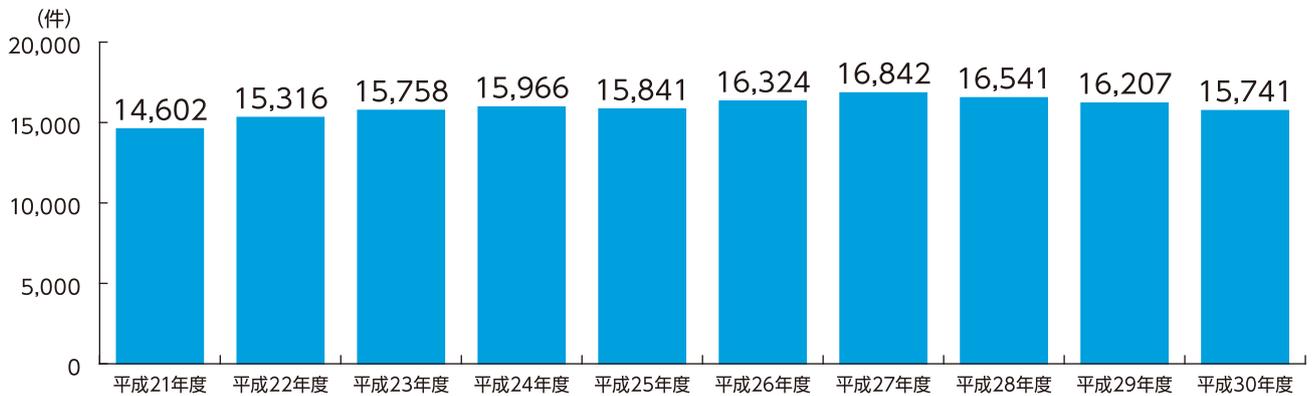
訪問看護利用延べ件数



訪問リハビリテーション利用延べ件数



通所リハビリテーション利用延べ件数

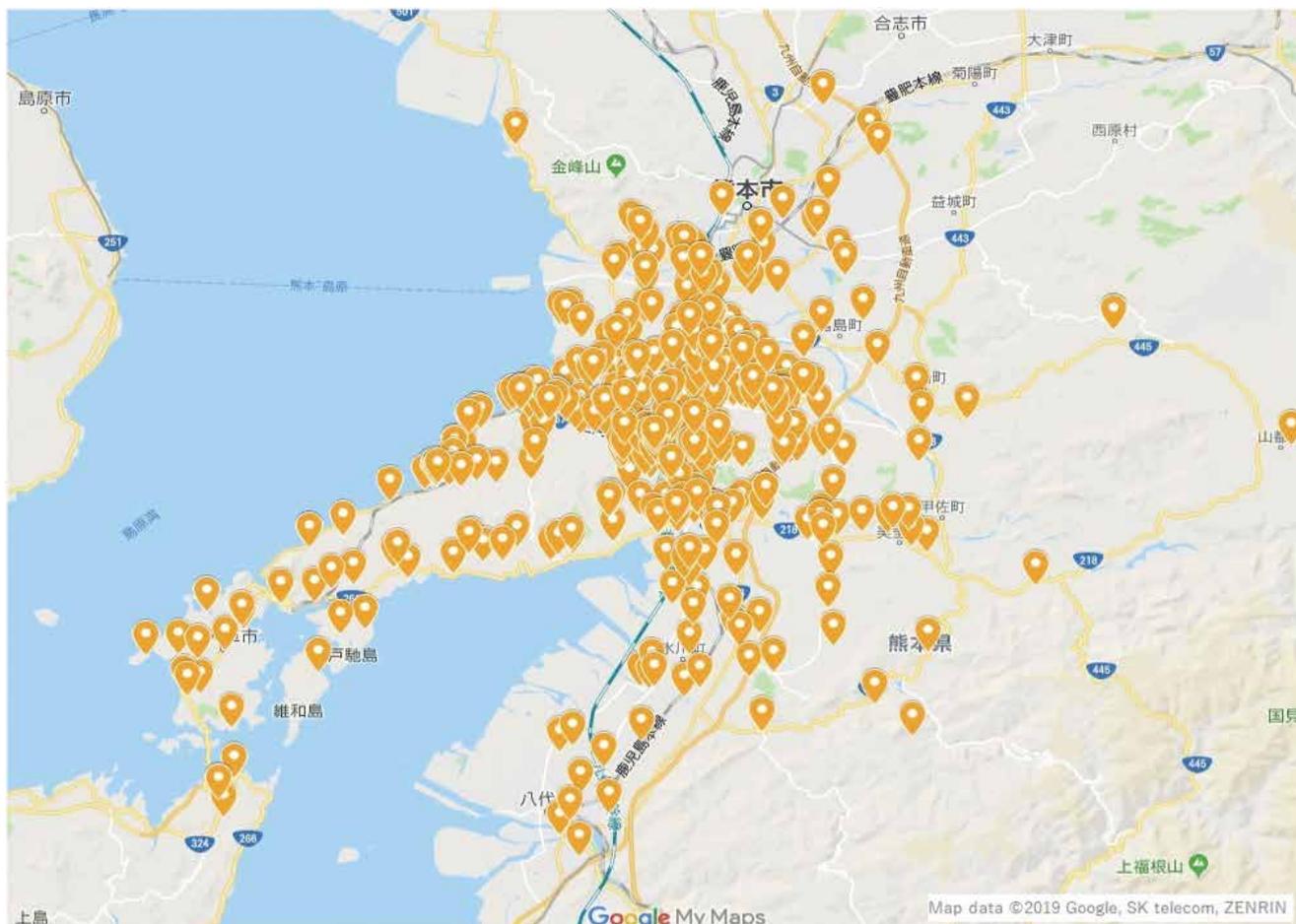
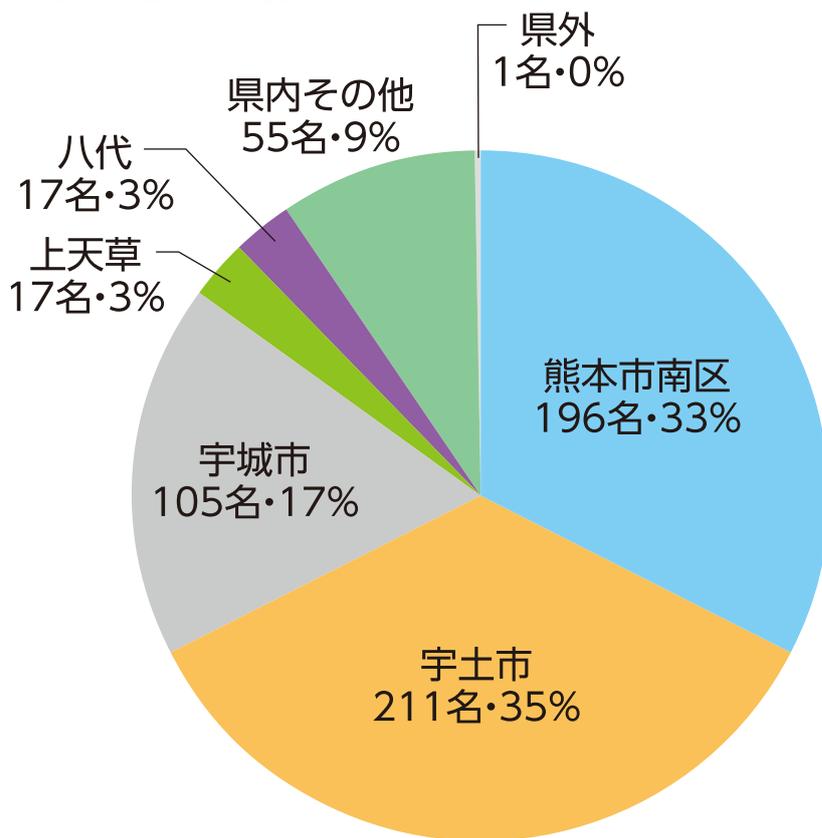


居宅介護支援事業所利用件数



9. 地域別入院患者数 (2018年4月~9月)

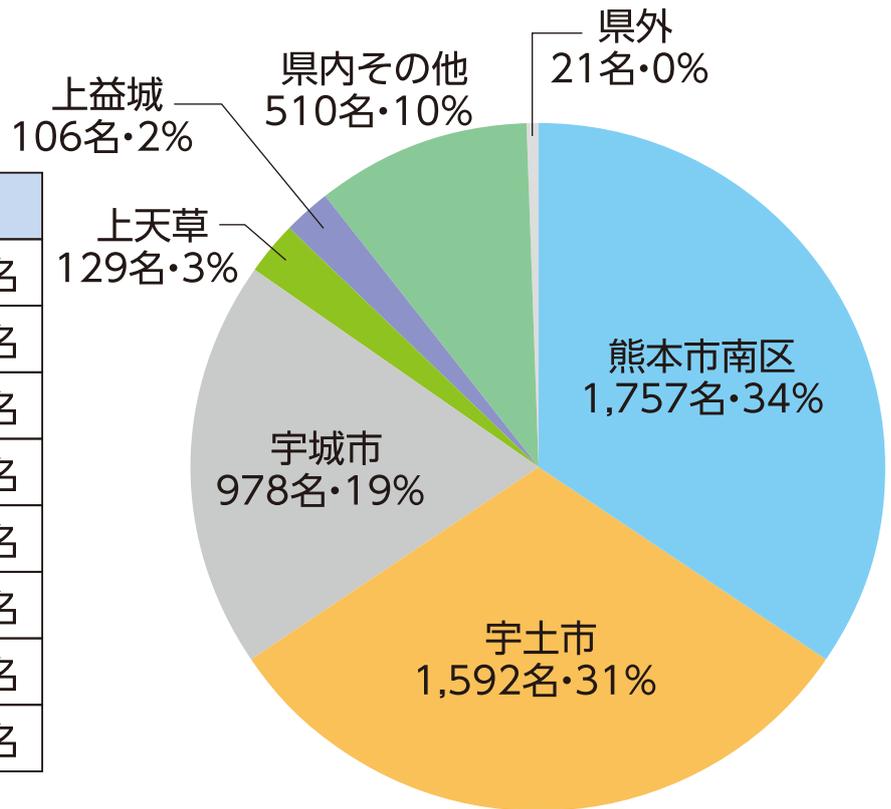
地域別	人数
熊本市南区	196名
宇土市	211名
宇城市	105名
上天草	17名
八代	17名
県内その他	55名
県外	1名
総数	602名



入院患者分布

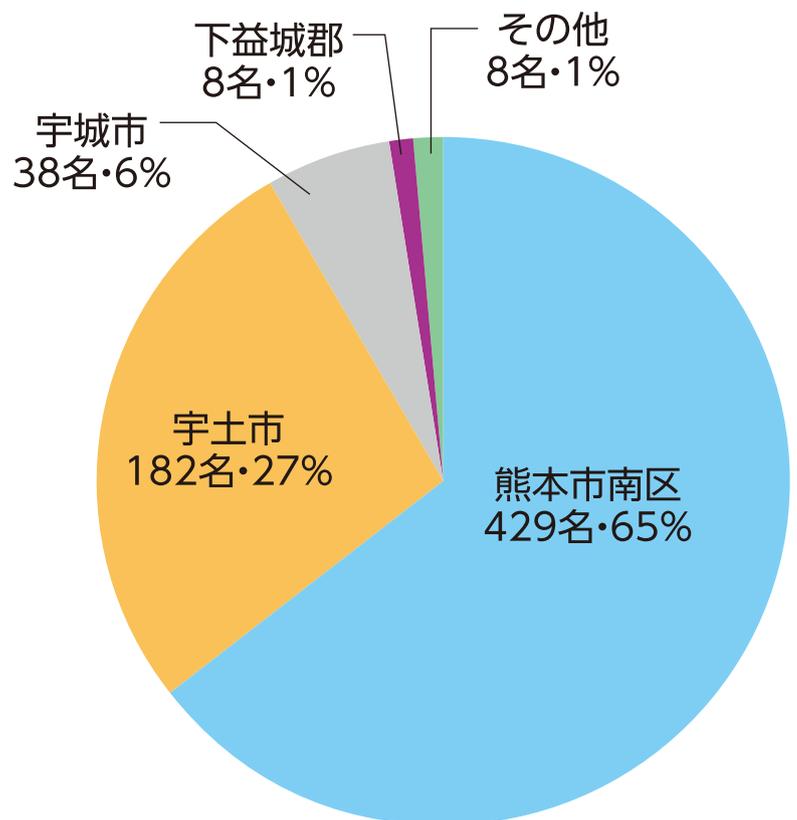
10. 地域別外来患者数 (2018年4月～9月)

地域別	人数
熊本市南区	1,757名
宇土市	1,592名
宇城市	978名
上天草	129名
上益城	106名
県内その他	510名
県外	21名
総数	5,093名



11. 地域別ハブセンター利用者数 (2018年4月～9月)

地域別	人数
熊本市南区	429名
宇土市	182名
宇城市	38名
下益城郡	8名
その他	8名
総数	665名





30年を
振り返って



30年を振り返って

私にとってかけがえのない10年

にしくまもと病院前理事長
医療法人相生会 新吉塚病院院長

小西 淳二



にしくまもと病院の皆様、創立30周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。平成16年7月より10年間にしくまもと病院で理事長を務めさせていただきました。私にとって本当にかげがえのない10年でした。その30年の中の10年を振り返ってみたいと思います。

邂逅:思いがけなくであうこと、めぐりあうこと(広辞苑)、林先生との出会いはまさに邂逅でした。東南産業の危機によりパートナーを模索されていた林先生は、引く手あまたの中から医療法人相生会代表の浦江隆次先生と意気投合されタッグを組む決断をされました。紆余曲折ありましたが、私と松永事務長の二人で熊本に赴任致しました。赴任当初は皆さんから白い目でみられ、コストカッターの異名もいただきました。しかしながら、職員の皆さんのひたむきな職場愛に大いに感銘を受け、ホスピタウン構想を掲げる林先生と必ずや立派なホスピタウンを成し遂げようと誓い合いました。

それからは、ISO 9001の取得、臨床薬理センターの立ち上げ、念願の本館の建設とまさに林先生と談論風発しながら成し遂げて来ました。もちろんその根幹には、職員の皆様の明るくひたむきな職場愛があったことを忘れることはできません。30年の重みを感じながら、これからも地域医療、介護、福祉に尽力し、熊本市南区での地域貢献に力を注いでいただきたいと思います。

にしくまもと病院の皆様、創立30周年おめでとうございます。



30年を振り返って

にしくまもと病院30周年記念 おめでとうございます

九州保健福祉大学 薬学部臨床生化学講座 教授
医療法人相生会 にしくまもと病院 非常勤医
呼吸器内科

佐藤 圭創



私が、にしくまもと病院に最初に勤務するようになったのは、平成2年(1990年)に呼吸器外来を1回/週するようになってから、以降、米国留学中の3年を除いて、通い続けています。医師として駆け出しのころから、現在に至るまで、たくさんの素晴らしい患者様やたくさんの優秀な医療・介護をはじめとする病院スタッフに出会い、いろいろな症例について学ばせていただき、非常に幸運だと思います。

平成2年ごろの壺井先生、中川先生時代は、なんでも診る総合診療科的な病院でした。それ以降、平成4年に「にしくまもと病院」に名称変更してからは、林先生、萩原先生、西村先生、有馬先生、辻先生が来られ、徐々に専門性が高くなり、さらに山口勉先生や増田先生の消化器科、山下先生の皮膚科、箕田先生の神経内科、篠原先生の糖尿病・内分泌科、吉田先生の一般内科と在宅診療、柳下先生の麻酔科、整形外科には、山口浩司先生や中島先生も加わり、泌尿器科、循環器内科の非常勤医師の外来診療が始まり、現在の地域医療をしっかりと担える総合病院としてのにしくまもと病院へと発展しました。私は、この進歩の過程を、非常勤ながらずっと一緒に歩んでくれたことが、幸せなことだと思います。

私の外来には、30年前におばあちゃんから始まり(祖母)、おばあちゃんの母(曾祖母)、娘、孫、ひ孫の5世代にわたってお付き合いさせていただいている患者さん一家が数家族おります。これが、地域医療の醍醐味だと考えます。

これからも、にしくまもと病院が発展し、この地域で患者・家族と医療・介護従事者が協働する医療・介護に邁進していくことを信じております。



30年を振り返って

30年のあゆみを振り返って

元富合町町長
富合校区社会福祉協議会
会長

村崎 秀



医療法人相生会にしくまもと病院の創立30周年を心からお祝い申し上げます。

私は、創立時から関わり、開院時の院長はじめとする設立関係者及びスタッフの皆様の姿が目には浮かびます。私の娘も開設準備期間から職員として働いておりました。当時院長の度重なる交代、患者が増えない問題、スタッフの力量の問題等、経営においては多くの問題を抱えていると傍らで感じていました。平成3年1月林先生が就任されました。若くてよそ者との噂で、「どうせまた…」の気持ちで信用性はありませんでした。ところが、私の気持ちを大きく変える一言と行動です。「医師は、技術だけではなく、患者と話すことだ」と熱く語られ、毎朝7時頃から全入院患者を廻り挨拶している姿です。この姿を見た時に「これは違うぞ」と確信しました。その後、診療科が増え患者も増え安定を感じました。しかし、創業グループの東南産業の件で、深刻な状況に陥り危機的状態になり、にしくまもと病院はどうなるのか私も心配しました。縁あり現在の医療法人相生会との業務提携により危機を脱し、今に至っていると思われま。院長はじめスタッフの「チカラ」と思います。今、整形外科では山口先生が人工膝置換術に頑張っておられます。みんな喜んでます。

平成20年に富合町は熊本市と合併し、現在人口は1万人超えに近い状況で、今後益々の増加が予測されます。どうぞ富合町で安心して暮らせる地域医療・介護・福祉づくりに期待します。

最後に、にしくまもと病院関係者のご健勝と地域にとって限りないご発展を心から祈念いたします。



30年を振り返って

30周年によせて

医療法人相生会にしくまもと病院
臨床薬理センター 副センター長
麻酔科

辻 重喜



にしくまもと病院に、今年で入職し、20年経過しました。私にとっては、最も長く在職した病院です。幸い病気もせず何とか勤めをつづけ、おかげさまで永年勤続20年の表彰を受けることができました。これから、麻酔科医の視点で感じたにしくまもと病院と病院の変遷を振り返りたいと思います。

平成10年頃は、バブル崩壊のあと景気低迷の時代になっていました。土地神話は消え、地価の下落や経済活動の減速など、このころは世の中がなにか元気の出ない風潮でした。平成14年に、にしくまもと病院も企業倒産などのあおりを受けたのですが、さいわい医療法人相生会との業務提携ができ、危機を乗り切ることができました。相生会は、臨床薬理(治験)事業を核に成長した医療法人で、私たちも新体制のもと、にしくまもと病院でも臨床薬理センターを設置すべく準備を開始しました。

平成16年、医療法人相生会にしくまもと病院へ法人名を変更、この時より小規模ながら臨床薬理センターが発足したのです。私も、臨床麻酔と臨床薬理の2業務につくこととなりました。このころから病院の業績は徐々に向上し、平成24年に新病院が開設し、臨床薬理センターも規模を拡大、現在に至っています。

思い出写真館



感謝の集い(関節鏡3,000例・人工関節300例 達成記念) 平成29年6月10日



みんなで準備開始



参加の方々齊に会場へ



記念撮影



林 茂院長 講演



山口 浩司先生 講演



皆さんありがとうございます。



きれいなお花です



イエーイ!



にしくまもと病院・連携フォーラム2019

平成31年1月19日



山口 育子先生と一緒に



連携施設代表挨拶 済生会熊本病院様



にしくまもと病院紹介 林 茂院長



たくさんの方にご聴講いただきました



特別講演座長 山口 浩司院長代行



ありがとうございました
(329名の来場)
最後まで笑顔!!



山口 育子先生を囲んで担当者集合写真



西熊本病院新築工事 地鎮祭



西熊本病院完成!



リハビリ棟落成式 2代目院長 壺井定雄先生



改名後の病院



職員の結婚式に参加 山村正統先生



東南産業会長 東家嘉幸衆議院議員



正面受付



街頭無料健康相談会参加



膝の健康教室 山口浩司先生 講演



新幹線車両基地バリア見学会



ワークライフバランス取り組み取材



園児と楽しく



消防署と合同消防訓練 はしご車体験と避難訓練



敬老会



病棟水漏れ・大水害発生



新人歓迎会



ボーリング大会



忘年会



にしくまもと病院前理事長
小西 淳二先生



相生会理事長
入江 伸先生



うと地蔵まつりに参加



骨粗しょう症勉強会 平成28年4月14日 熊本地震40分前に撮影



新病棟内覧会



新病棟での診療開始



ホスピタウハウス内覧会



ハロウィン(5階病棟)入院患者さん大爆笑!



クリスマス会



キャンドルサービス



ホスピタウン祭り:松野明美さん・くまモン・ひごまる登場





職員集合写真

平成31年1月

編集後記

地域の方々をはじめとして多くの方々の温かいご支援のお陰で、医療法人相生会にしくまもと病院は、開院30周年を迎えることができました。これを記念して本誌を作成することとなりました。編集委員は、若手・中堅・ベテラン職員で構成されており、当院の歴史を振り返り、未来への糧となることを期待して作成に臨みました。

にしくまもと病院創立20周年以後は、新病棟の建築を機に診療内容の拡充と各部門の活動、病院行事等の活動が活発となりました。

この記念誌は、平成30年間を歩んできた過去、そしてこれからの熱い思いが凝縮されています。より良い記念誌を作りたいという担当者の思いから、月1回の会議は徐々に週1回となり、長時間のミーティングとなることもしばしばでした。また、外部の方々のお力をかりながら、お陰様で皆様のお手元に記念誌をお届けできる事となりました。にしくまもと病院を知っていただくための資料としてご活用していただければ幸いです。

創立30周年を迎えたにしくまもと病院をこれまで公私共に支えてくださったたくさんの皆様に、誌面をお借りしてお礼申し上げます。皆様のご健康を願いまして、編集委員一同の挨拶とさせていただきます。

創立30周年記念誌 編集委員

林 茂・柳下芳寛・水上優子・佐藤紀代美・田中智寛・
鳥井卓史・緒方あづさ・俵積田朱美・松本佳与子・佐藤佳代子



医療法人相生会 にしくまもと病院 創立30周年記念誌

発行日 平成31年4月30日

発行者 医療法人相生会 にしくまもと病院
病院長 林 茂
〒861-4157 熊本県熊本市南区富合町古閑1012
TEL.096-358-1118
FAX.096-358-1099
<http://www.nishikuma.com/>

印刷会社 弘栄印刷株式会社

30th ANNIVERSARY



医療法人 相生会

にしくまもと病院

